糸櫻本町育

座元　豊竹新太夫

淺草の段

詞抑も當時金龍山淺草寺と申すは。人皇三十四代推古天皇の御宇海中より出現の靈像でござる。常に開帳は叶ひませぬ近う寄つて御緣を結ばれませう。内陣は結緣でござると。地緣起さら〳〵貴賤群集。押合ひへしあひ南無阿彌陀　フシ後堂へとうち群れ行く。地群集の中に一際立つ上州赤城殿の奥方。お國歸りの道よりも大悲の誓かげ頼む。開帳參りも腰元は男を拜む尻目遣ひ。神原左五郎山住五平太御供にて　フシ暫し床几に休らひ給ふ。地山住五平太しやくり出で。詞御前には御覽なされしか。只今參る道の因果地藏扨きつい流行やう。何でも私が因果で御座るとさへいへば。モどんな六ケ敷い願ひでも又はどんな及ばぬ戀路でも。ついすゝ〳〵と叶ひますと。地小糸を横に塩の眼は隨分細い心でも。フシ只常體の目玉なり。地腰元お熊がとんきよ聲。詞わしは金龍山の餅屋ばつかり覗いた故。とんと因果を見はづしたなら小糸殿。ヲ、さもし。それはさうと今來る道でも。ふくりん糖や弘慶子かはつた形ちやないかいな。サあの弘慶子といふは。何の藥ぢやそれ知つてか。どうやら何ぞに付けたらば。ひり〳〵しさうに思はるゝと。地袖打掩へば腰元小糸。詞アレ〳〵御前樣御覽じませ　アノ向うにある提燈。サお熊殿。讀めるか爰から讀んで見や。ヲ、何ぢや。三浦屋の花咲。アゝどんな女郎ぢや見たいなと　フシ噂半ばへ。廓馴れて。苦界苦にせぬしこなしも。二十の上は三つか四つ五つの町に。名も高く　ホオクリ今を。さかりの花咲が。今日身揚りのフシ觀音參り。地奥方の御意承はり。神原左五郎立出でて。詞卒爾ながらお傾城。これに御座るは拙者が主人の奥方。廓の風俗珍らしく。暫し御足留めたしと御意は請けても田舍の無骨。申しやうも存ぜぬながら。情を商ふお傾城。苦しからずはこれにて一服。地頼み入ると三つ指に。詞ホホ、、ヲ、かた。したが廓の内ではなし粋も不粋もいらぬ爰女中樣のお客といひ。何の遠慮も　地長煙管。もみぢ。煙草と大やうにおめる氣色も　フシ投げ嶋田髪を詠めつ衣裳の模樣。屋敷女中の物見たけフシ呵き領き喧し。地行く水と過ぐる月

日と散る花と。つかひ捨てたる身は元へ何れ返へらぬ世の中や。憂き勘當にあひ馴れしかの花咲に逢ひたさの。身は占ひのうら表町家々を聲高く。詞當卦本卦の占ひ願ひ望みの考へ。手の筋見るは法樂と。地呼びあるく身は本町に名高き中根屋綱五郎が フシ成れる果てこそ淺ましき。地腰元ども聞付けて。何でもこれもお慰み。手の筋を見て貰ひなぶらうではあるまいか、コリヤよからうとお熊が立出で。コレ占ひと フシ呼ばれてこなたに畏り。詞拙者が占ひは弘法大師一子相傳にて。或は人相の善惡。失物駈落夢判じ。年寄の銀煙管若息子の紙子羽織小父貴のにきび母者人の聲がはり小娘の疝氣まで。奇妙な見通し錢次第。地手の筋見るは法樂なりとぞ フシ喋舌りける。地そんなら法樂から見て貰ふと腰元の。お熊が出す手を打詠め。詞ハ、先づ器用筋と見えるわ。名を指いて見せうか。ム、きのか。おけふか。おことか。おかいか。おなあか。イ、エお熊といひやんす。ム、成程白木屋の様な筋ぢや。扨かう見た所にこなたの望み事は。中の芝居が見たからうが。それ〳〵笑ひを含んでぢやと。地いふうち小糸が思ひ付き。五平太に吹込めば呑込んで罷出で。詞扨これなるは拙者が妻同然の者。手の筋を見て貰はうと。地いやがる太夫を無理やりに押出せば花咲が。若しかの人に逢ふ瀬もやと差出す手先。詞顏と顏。詞ヤア綱様。そなたはア、コレ慥かにそれと見通しの法印様。めつたに麁相な事はあるまい。考へ違ひもあるもの。急かずと私が身の上。様子があらうと何事も。あたりさはりのない様に。ナ占つて下さんせ。ム、お前がアノ。あなたの奥様ハテなあ。いか様知れぬ人心。手前がしやうげな儘に。人の詞も眞實震の封と思ひ。兌上斷まされてのぼり詰め。親の坎中連を受けて。當卦本卦を追出されモウ絶體絶命とは思へど。せめて今一度は。逢ふも不思議逢はぬも不思議のうらやさん。利根さうに女の詞を。一代の守り本尊とはいかい白痴。微塵もゆこんは殘らぬと。いふは心のうらやさん餘所に言ひなす フシ恨みの蓍木。詞サアそれには段々様子もあれど。今は人目の。ナ。せき立つ心をトう鎭めて。手の筋見てと差出すを 地どれと取る手を袖の内。それと言はねど締める手に變らぬ心江戸ぐくり袂ぞ繼の。きまりなる。地折から宿坊圓了院。奥方の前に手をつかへ。詞御國御發駕の今日當寺へ立寄られ。御家の重寶定家卿の小倉色紙御奉納下さる由先達て御知らせ則ち客殿しつらひ置き候へば。早や御入と慇懃に。地奥方もしとやかに。詞それは御念の入りし事。

イザお傾城も御苦勞ながら。酒一つすゝめたし。地是非にとばかり御挨拶。辭むも愛嬌こぼれ梅別れる心驚や。經讀む寺の宿坊へ フシ皆々引連れ入り給ふ。地後にうつかり綱五郎。詞ア思ひも寄らぬ今のしだら。しかし花咲は請出されたか。但しは嘘かア、儘よ。地情を賣るが其身の商賣。我等も商賣始めましよと。葭簀圍ひの張襖懸看板の書判も。兎角穴めがむつかしいと。獨りつぶやき机を直し。オクリ浮世のへ迷ひを待ち居たる。地月花の。フシ外に男と。いふ詠め屋敷勤めの外珍らしく。往來を見んと腰元の。小糸が後から神原左五郎。詞小糸殿そもじはそこに何してぞ。アイ開帳參りの女中を見ようと思うて。ム、イヤ女中ぢやあるまい當世のきん〳〵男を見立てにお出でなされたか。我等が樣な田舍侍は御意に入らぬも御尤もさりながら。そこがお情コレ。此文あけて見たとてもあんまり間も當るまい。地コレどうぞいなうと フシ寄添へば。地つんとすげなう立退いて。詞左五郎樣堅い屋敷の御格式。御存じない事はあるまい。そんなみだらなことをして侍が濟みますかえ。お國へ歸れば猶の事。お年寄の尾上殿岩藤殿。不義はお家の戯しい御法度。若いお方が袖褄引くともかんまへて浮かされなとの言付け。殊にわたしやお前のやうに生白けた男は嫌ひ。わたしが好きはかう色も薄赤うて。鎌髭あつて强さうで侍らしい男がすき。男の目には鈴を張れとやらいふに。お前の樣な糸のやうな尪弱な侍と女夫になる事いやいなと。地振付けられて手をもぢ〳〵。後に立聞く山住五平太。コリヤ註文は我が事と衣紋繕ひ フシ鬢かき撫で。詞左五郎〳〵と。地いふに悔りコレサ神原。詞御奉納の色紙は貴樣の役目。今御前のお尋ね早く〳〵と胴調聲。地うろうろきよろ〳〵神原は。フシ御前へこそは駈り行く。地入替づて五平太が。詞コレサ是々つれないぞや〳〵。此間見ると口說き。逢ふと口說き。心を盡す心中男。さうむごうはせぬものだ。アレ〳〵〳〵あの川へ渡せる橋も。あづま橋とは文字にさへ地サハリ吾妻橋と讀むわいなあ。コレ〳〵是さ〳〵。拜む〳〵そしてから今のお詞を聞く所が。强さうな男を御吟味なさるゝ思召しかな。アイモわたしや芝居見にいても三五郎や八百藏はきつい嫌ひ。わたしが最屓は友右衛門介五郎。何敵役が御最屓とや。友右衛門魚樂なら我等へ札の落ちる筈。コレ色薄赤く强さうで。きつとした侍らしい此五平太。コレ〳〵〳〵相談する氣は中橋かと。地じつと取る手を押退け。詞お嗜みなされませ。不義はお家の御法度今も今とて左五郎殿

の詞。振付けたを御存じないかえ。但しお國へ歸り。御家老樣へ此通り申上げうか。ヒヤウすりやアノ立役も敵役も嫌ひぢやな。ハイ二度みだらな事おつしやると其分では許しませぬぞ。が只今は旅懸の事。以來をきつとお嗜みと。地堅う出られて。詞ハイ〳〵。委細承知仕る。必ず御沙汰御無用と地眞面目に白ける後より。詞五平太〳〵今御前のお召。早く早くと　左五郎が呼聲しほに手持ち無沙汰。フシこそ〳〵と逃げて行く。地邊り見廻しコレ小糸。詞左五郎樣。言合せた通り。まんまと五平太が口說の根は切つて仕舞うた。さいなあ毎日々々口說くが嫌さ。お前とわしが中のこと若しや知れては五の身の上。それ故お前を振つて見せたりや。眞かと思うてよい氣味〳〵。サアこれからはほんまの色事コレ嘘ぢやないかや何のいなア。地わたしやいつそと寄添うて抱き付く身はとてもなら。體も一所に。フシなりたい思ひ。後に立聞く綱五郎。詞ヨウ〳〵有難の。ヨヽ。おそろしいの二人が惚りアヽこれ〳〵。怖がる所ぢやない。何かの事を見通しの賣ト者。なるかならぬの手の筋から文の墨色よしあしに。戀といふ字の書判も穴數一つの考へ物。粹ぢや通ぢや。大事ない。葭簀の内を貸してやろ。ついちよこ〳〵と小ぎりめに。ちよんぎまりとはどうあっう。地サア〳〵早うといふを機會。目許に物を言はせ合ひそんなら暫くこの内を。詞ハテお辭儀には及ばぬと。地二人を突きやり押しやつて。詞扨どうせう豆藏でも見てこうか。奥山一遍あるいて來たら。其間に大かた埒も明こと。地緣を結んだ綱五郎フシ氣を通してぞ急ぎ行く。座敷をぬけて。花咲がオクリ勤めの。外の酒機嫌戀しき人に淡路嶋。思ひに通ふ千鳥足あたり見廻し占ひの。看板目當に。詞綱樣。綱樣是はしたり。留守かいなと地覗く葭簀に怪しき影。ヲヽしんきやとフシ立退けば。地樣子窺ふ乞食が。下ありませ〳〵。ヲヽ知らぬわいの。ハイお結構な女中樣。戴かして下ありませと。地藪から出した亂れ咲。怖さ半分山吹色。禿が包みフシ手あたり次第イエ〳〵申しこんな物はいりませぬ。ムヽそんならそなたは何が望み。ハイお情らしい女中樣。毎夜〳〵のお餘りがあるならば。どうぞお情に戴かして下ありませと。地付込むねだりどす聲に。さすがそれしやの物馴れて。詞成程勤めの身なれば情をくれとは何にもせよ嬉しい事。シタガ親方に養はるゝ身わし儘にもならぬといふのか。そんなら爰へは何しにお出で。サアアノわたしや待人をヲツト見て貰ひにと言ふやうなことであろハテ當世の若い者

は客に女郎を買はせて置いて。こつそり小宿のちよん〳〵幕。へヽヽモウ金というてはない體。モ惚れたが因果地蔵様も御照覽。アイどうぞお情に横番切らして下ありませと。地口説きかゝるは身を知らぬ破れ布子に緋縮緬刺繍と。襤褸の取合ひは。岩のはざまに浮草の。フシ花の咲き出し如くなり。地何と詮方花咲が。イヤモウさう言はれては逢はねばならぬ様なれど。今日はお客に買はれぬ此身。身揚りは女郎の榮耀。今日一日はわしらが氣休み。廓の内なら情を賣るが身の代がはり。廓の外では常の女も同じ事。ハテいつなりと廓へさへござんしたら。情を賣つて上げやんしよと。地理詰に此方も。フシ口あんごり。詞そんなら必ず廓では。サアお近い内にも地言捨てに小褄かい取り衣紋坂。フシ吉原さして立歸る。うろうろ眼に山住五平太。詞ハテめんえうなコリヤ非人。爰らへ二十二三の男と十七八ばかりの女は來ぬか。テモきつい急き樣。イヤサこれが急かずに居られうか。コリヤ乞食ではないコレ先生々々。どうぞ教へてくれぬかい。イヤモ事によつたら教へませうが。それ聞いてどうなされます。ヲヽサ聞かせてさへくれるなら褒美は望み次第サどうか〳〵。マヽ急かずとお聞きなされませ。イヤサこれがせかずにゐられうか。ムヽ褒美とあれば。サどうか〳〵。言はずばなるまい。サヽヽサどうか〳〵何と〳〵〳〵。エヽさりとてはやかましいイヤサ是がせかずに居られうか。サヽどうか〳〵と地せき立つ山住立寄る非人。コレかう〳〵と呼けば。詞ヒヤウそんなら此内。シイ引摺り出してどうなされます。知れたこと重ねて置いて四つにするシイ。サ切つてお前の言譯は。ムヽサそれは。人を殺せばお侍樣でも御切腹か輕うて御扶持は上りますぞえ。ムヽいか樣そこがあるわいの。サそれぢやによつていつそかうなされませぬかと地耳に口。詞ヤコリヤ面白いそんならあの色紙を盗んでシテ。褒美はきつさり御合點か。いけと惡事を呑込み呑込み地羨しげに葭簀の方。戀と。慾と右左オクリ立別へれてぞ入りにける。地うそうそ戻る綱五郎。モウよい時分と葭簀の圍ひ。這入りかゝつて南無三まだぢやと咳拂ひ。詞何とモウよからうぢやないかな。イヤモさう長う盆がふさがつては。迷惑至極の賣ト者。ちと足り苦しうして置かんせと。地詞にさすがフシはぢ紅葉。地顏を赤めて左五郎小糸。どなたか知らぬが此御恩。詞アヽお禮受けよとて取持ちは仕らぬ。アヽそれ女中樣。髻に紙が付いてある。お侍樣ソレ。お前の右の口許に紅が少しと地氣を付けられ。髪を直しつ

顔ふくやらわけも媚く戀中の。御緣もあらばと互の會釋。フシ詞少なに別れ行く。詞エ、うまいことして置きながら。何喰はぬ顔でハ、ヽ、。それはさうと。花咲はいんだか。不思議に廻り逢うたもの。地殘り多やと言ひつゝも。机に直るフシ折からに。地生業の。ホフシ糸によりくる老の波。フシ本町二丁目。中根屋の母妙閑。娘お房を杖柱開張參りの手には珠數。ホオクリ現世。未來の願ひより勘當の子に逢ひたさの。長地心をこめの袋から報謝も涙の種蒔きて鳩鷄を見るからに誰か生きとし生けるもの。子を悲しまぬはなきものを。詞三人の子は持ちながら。兄の綱五郎は勘當する。妹は藁の上からお屋敷へ養子にやる。地そなた一人を力草兄めはどこにゐる事ぞと。思へば後生もどこへやら觀音樣に向うても。詞綱五郎が息災と。祈る母が心も知らず。勘當の詫にも來ず。來たら許そと思ふばかり。地親の心子知らずと。因果な奴めと憂き時は。恨みながらもさりとては我が子の行方安穩と フシ祈る心ぞ哀れなる。詞又かか樣の兄樣のこと。言ひ出して泣かしやんす。どうぞ廻り逢うたらば。勘當許して上げまして。ヲヽそりやおれに如才はない。よつ程塩も踏んだからは。許さいで何とせう。そなたも背丈の伸びるまで。地かうして置く筈はなけれども親父殿は去年秋死なしやる。兄が内へ戻らぬ中はわしが力がない故に。詞二十の今日まで嫁入もさせぬ。ちつとの間ぢや辛抱しや。ヲヽ何のまあ。わたしやいつ迄も。嫁入はせいでも大事ない。兄樣と二人して。お前を樂に養ひます。お心遣ひさしやんすなと。地いふにほろりと涙ぐみ。詞よういうてくれたなア。それに付いても養子にやつた妹は無事で居ることか。其後便りも聞かねば。地案じらるゝとぐど〳〵と。タヽキ思ひに足も踏迷ふ。親の心は子しらずと。詞醫のふしの陰陽師。幸ひの賣卜者。詞子供らが身の行方念ばらし占うて貰はうと。地立寄りて小腰をかゞめ。詞お邪魔ながらちよつと御覽じて下さりませ。モ年寄りまして悪い入りまい。内を出ました子供の身の上。息災でをりますことか。とつくりと御覽じて。下さりませと差出す。地手の筋よりも親子の血筋。それとも知らず知らぬ同士何心なく綱五郎。見るよりハツト恟りの。胸なでおろし素知らぬふり。詞悟られまじと作り聲。ア、よいお手の筋。したが一人の男の子はあれど、御勘當なされたの。其人も今では根性も改まり。先非を悔いてゐらるれど、町所の人目もあれば。詫びに行くにも行かれぬ仕儀。年月の經つにつけ兩親の御高恩。骨身にし

みゞ〳〵忘られず。思ひ出す度毎に。泣いてばつかり暮されます。ヲヽ見通しのお占ひよう當りました其通り。シテ其兄めは何所に居ますと。地問はれて胸も張裂く思ひ。詞イヤ隨分無事でござれども。今は西國邊に居らるれば。つい廻り逢ふ事もござるまい。コレお房遠國にゐるといなう。地老ひさらぼいし此母がいつまで命があるものぞ。つい廻り逢ふ事もならぬといふは前生の。いかなる報ひか淺ましやとわつとばかりに母お房。歎くを見兼ね綱五郎忍び涙は編笠の フシいひ甲斐もなき風情なり。地涙拂うて綱五郎。詞成程お歎きは理ながら。お歸りあつてお連合ひともお仕事なされ。相應な御養子でもなされませ。情なや。其連合ひは去年の秋死なれましたわいなう。何親人は御死去とや。ハアハツトばかりに綱五郎スエテ前後不覺の有樣に。地お房がそれと見付ける顏。詞エヽお前は兄樣。綱五郎樣ぢやないかいな。コレ〳〵かゝ樣か樣。兄樣ぢやわいな〳〵〳〵。ヤアヤア。どれ〳〵ほんにそなたは綱五郎。ヤレなつかしや〳〵。よう息災で居てたもつた。がなぜ初めから有樣に。打明けてはたもらぬぞ。地年寄つた此母が尋ね焦れてゐる心。少しは推量せよかしと。母と妹は取縋り。嬉し懐かし親と子が。フシ悦び涙ぞ道理なる。詞ハヽ誤りました母者人只今の身を耻ぢて。名乘るまじと思ひしが。親父樣の御死去の事。聞いて我が身も忘れ果て。地面目もなき御對面と。スエ大地に喰付き泣きゐたる。詞イヤ〳〵泣いてゐる處でない。さつきにからの詞の端。モウ根性も直つたさうな。アイ〳〵どうぞ兄樣の御勘當。ヲヽ許さいで何とせう。スリヤアノ御勘當御免とな。ヲヽ早う連れて歸り。伯父御十兵衛殿にも相談して。早う家が渡したい。ハヽヽヽ有難し。然らば直樣御供と。地店片付けるも妹が手傳ひ。今日御勘當許されんとは夢にも知らぬ賣ト者。是が誠に陰陽師身の上知らずと戯れて始めの歎き引替へて親子兄妹水入らず。盡きせぬ緣の綱五郎。フシ引連れいそ〳〵立歸る。色紙の箱を引抱へ。仕濟まし顏に以前の乞食。跡から付いて山住五平太。詞コリヤ本名は最前聞いた九郎兵衛とやら。其代物を代なして出世の蔓に。ヲヽ合點。お前も彼奴めをぼいまくり。かの戀人を。呑込んだ重ねて。地さらばと乞食は何所ともなくフシ迯失せけり。地色紙の見えぬに神原左五郎。氣も狂亂の亂れ髪。駈出すを五平太整かけ。詞コ左五郎あわたゞしい何事ぢやイヤサ大切の小倉色紙お次の床に置いたる處。かいくれに行方知れず。ヤア〳〵〳〵そりやヲヽ大事。マ飛んだこと

のそれがなければ國へ歸つて。わりや言譯はないぞよわれ。コリヤ生耻晒さうより。今爰で腹切つてくたばつて仕舞ふさ朋輩のよしみ。介錯して取らさうと。地心付けられ若氣の左五郎。南無阿彌陀佛と覺悟の體。詞ヤレ待て暫しと地奥方に。引添ふ腰元小糸は半亂フシ生きた心地はなかりけり。詞思はず紛失の色紙。誰が業とも知らねば。切腹とは麁忽々々。イヤサ奥様。どれ程に仰せられても紛失の言譯は。ハテ今日此所にて此色紙が失せんとて。言譯の仕置きはない筈。預りの左五郎切腹して。誰が色紙の詮議はするぞ。サソレハ。但しお身に言付けたらいつ何日までに吟味して。差出す思案ばしあつての事か。サヅそれは。推參千萬控へて居よと。地てつぺい挫ぎに五平太が。しかんだ顏の苦味にて。フシ小糸が癪は下りけり。地神原左五郎兩手をつき。詞不調法なる拙者めを。生き延びよとは冥加なし。此儘お暇下し置かれば。雲の上地の底と潜つても。尋ね出して其時は。ヲヲ替らぬ主從歸參を待つと。地早や御立ちの臺笠立傘。涙の雨は凌ぎかね小糸が心の亂れ糸いとし可愛いも仇枕。フシ是非なく〳〵も立上る。詞扶持放れの左五郎に。大小無益と五平太が。フシ直様にもぎ取れば。地よしや此身は暫し耻たとへ町人商人の姿となつても小倉色紙。取返さでおくべきかと。詞のはしは。嘘もなく本町二丁目糸屋にて。妹のお房に左七とて。世に諷はれし。優男末に。浮名を流しける

第二　屋形の段

唄これの御殿は目出度い御殿。鶴と龜とが舞ひ遊ぶおめでたや。千代のこおめでたやよい〳〵。ナホス地諷ふフシ聲々賑しく。地赤城殿の國舘奥は年々暮毎に。煤掃過ぎは女中達殿御始め御家老も。胴に上げるを樂しみに。男の肌に觸るのは年に一度の。フシ天の川。詞ナウお梶殿小笹殿。いつでも此様に年の暮には。人見ると胴に上げ。日頃憎いと思ふ人は、どつさり落して腰を打たし。又可愛い男は。上げるふりで手を握るのが皆樂しみ。サレバイノ。お暇の出た神原左五郎殿。何でも此暮には思ひ入れ手を握り。どこもかしこも締め付けうと思うたに。サイナウコレそれに付けても小糸殿。左五郎殿との譯は。こちらも知つて知らぬ振してやつたが。お年寄の岩藤殿が聞付けて。殊に懷胎ぢやとて此頃からの責せつちやう。そして御用人の五平太面が。全體惚れて口說いたを。振付けられた意趣ばらし。岩藤殿は五平太殿の伯母御なりや。一入詮議に念が入ると。フシ噂なかばへ奥より

も。御一家よりの歳暮のお使者。四角四面の根來主膳。詞お女中。歳暮目出度う御座る。明春ゆる〳〵御意得ませうと。地出づるを見るより主膳殿。お祝ひ申しませうと言ふより早くばら〳〵〳〵。手取り足取り女中達。唄めでた〳〵の若松様よ枝も榮える葉も茂るおめでたや。千代のこひやうたんぢやよい〳〵。詞アヽモウ御免々々さて〳〵御苦勞奈いと。地麻上下も皺だらけ腰をさすつて。フシ逃歸る。地それ〳〵そこへ御家老樣。上げる色目をけどられなと フシ小陰にかくるる。其所へ。地さすが家老の勿體らしく白と黑とのあはせ鬢。朱鞘の大小のつく〳〵尉斗目も立派に入り來る。それとかけ聲五六人。コリヤたまらぬと袖振放し駈出すを。御嘉例が外れます。ならぬならぬと武者ぶり付く。女中相手に力も出されず。多勢に無勢御家老も。是非なく女中のお手車。唄千代のこひやうたんぢやよい〳〵。詞アイタヽヽこんな時は劒術柔術も何の益にも立たぬもの是が家老の樣かいと地苦り。切つて逃行く跡フシどつと笑ひを催せり。地跡へ入り來る山住五平太。又立ちかゝる女中達睨み廻して。詞うぬら此五平太に指でも指すと。どこもかしこも引き捲くるぞ。ヲヽ捲くるなら捲くつて見や。捲くらるゝが怖いとて。お舘の祝儀は外されぬと。地強う出られて。詞コレサ〳〵眞平御免。實はかうぢや。此上下小袖は今日藏おろし。皺になつては正月が見苦しい。髮は一重にお情〳〵。奥樣へは上げた分にして。御嘉例は濟しておくりやれ。是ぢや。地是ぢやと顏を疊。詞ハテさうおつしやれば上げにくい。赦してあげるお通りと。地言ふに嬉しくヤレ〳〵奈い。詞此お禮はきつと〳〵。薩摩芋三貫目ばかり進上と。地言ひつゝ通るをやり過し。後抱きに惣々が。憎さも憎しと唄なしに。敷居へどつさり腰骨打たせ。手を打ちフシ叩き逃げて入る。地五平太は顏しかめ。詞ア、えらい目に逢はせをつた。智慧まん〳〵たる某もだますに手なし。つい落しても能い事を。意地悪う敷居の上。陰囊ぴしやと言はしたと。地しかみ返つてゐる所へ。奥御殿お年寄とて鼻高く。おのが儘なる老女岩藤。のう〳〵と立出て。詞ヤレ五平太か待兼ねました。ヲヽ伯母者人。扨て小糸めはどうで御座る。サレバイノ表向きはきつと貰めて內證では。五平太にうんとさへ言へば。御前樣へはよい樣に言うて赦しやるとて。割つつ口說いつ言うて見れど。かぶりばかり振りくさる。コリヤもう兼ねて言うた通りせずばなるまいわいの。サそれについてカノおろし藥。やつと調へました。がこれ

を飲ましては。ハテ飲ますというて嚇したりや。懐胎してをるは定。怖さにうんといふまいものでもない。又嫌とぬかせば此方も意地。口押割つても飲さにや置かぬ。ムヽ面白い。然らば後程伯母者人。ヲヽ合點々々。ヤコレ〳〵お腰元衆。此藥煎じて置かしやれ。大事の藥ぢや粗末にせまいぞ。サア甥の殿イザ奥へと。地呑込む一味のきほひに。伯母に フシ打連れ入りにけり。地始終を聞いて立出づる。女中預かり尾上とて。文庫結びのしめくゝり打掛姿しとやかに。ドレ其藥と手に取つてつく〳〵見。詞ムヽよし〳〵。それ早う煎じてやらしやんせと。地袂の内で摺替へて。素知らぬふりに フシ奥へ入る。地小身の身。フシの悲しさは我が子にも。奥と表と分隔て。逢ふことかたき石塚彌三兵衛。願書携へおづ〳〵と錠口を差覗き。詞ヤなに女中方。勘定役石塚彌三兵衛。お願ひに參つたと。御老女方へお取次と フシ打萎れてぞ控へゐる。地ゆがみにゆがむ岩藤が。出合ひ頭に彌三兵衛を。見ても見ぬふり錠口の。襖ばつたり女ども。詞小糸めを引摺り出せ。ドリヤ地一責めと當てこすり。煙草の煙フシ空うそぶく。詞イヤ申し岩藤様。彌三兵衛で御座ります。お願ひの一通り。お聞きなされ下さりませう。知りませぬ。今日の取次の當番は相役尾上。わしは小糸を詮議の役。依怙贔屓のない正道な仕様。襖の外から聞かしやれと。地態と親子の顔さへも。見せぬ胴慾彌三兵衛は。涙かくして。詞サ其娘小糸めが事に就いてのお願ひ。知らぬわいの。イヤサ小糸と申すは義理ある娘。實の親は江戸本町二丁目。中根屋と申す糸商賣。藥の上より貰ひ置き、エやかましい。取次は尾上殿。コレヤ女ども。ソレ小糸を引摺つてうせあがれと地わゝりちらける フシ憎々しさ。地奥より出づる山住五平太。詞何岩藤殿。拙者は御用に就いて江戸表へ發足。隨分ともおぬかりはあるまいがな。ナソレ今の事を。ヲヽそれは合點。伯母に如才はないわいの。氣遣ひせずと早う戻りやと。地領き合うて フシ出て行く先。詞ホ彌三兵衛。何ぢや泣くか。エヽ小糸が事に就いてか。コリヤ尤も。嘸ぞ娘に逢ひたからうが。何ぼ逢ひたうても勘定役位ではお錠口は通られぬ。そこは用人の忝けなさ。我が内も同然に。どこまでも行きぬける。ハヽヽヽヤ此敷居が越えたからうがならぬわい。家柄といふものは違つたものさ。よい年しても奥へは叶はぬ。拙者などは水の出端の若盛。女が見るとびろ〳〵とびろ付く程の美男なれど。何所までもつか〳〵通る御用人。が出頭もはや御用の多さで甚だ迷惑。江

戸へ出ても屋敷方の交際。今日は吉原明日は深川のと。遊ぶことにもほつとするわい。ヤ又堺町葺屋町の茶屋どもが料理。深川西の宮洲崎の舛屋大川屋。樂庵の百川のと。モうまい物も毎日は雛儀なことさ。お身などは何が。朝は茶粥に焼味噌。蚩は座禪豆もみ大根。祝儀日などはくわつと奢つてさんまの干物。ハ、、ハ、。どりや。㌘参らうと惡口嘲弄疊。フシ蹴立てて出でて行く武家の。役儀ぞ是非もなき。㌘岩藤は膝立直し。詞此小糸めは何してをる。きり〳〵うせうと㌘つこど擘。もれて フシ一間を立出づる。二上リサハリ無惨やな糸が身の。糸より細く窶れ果て。日毎の責めに泣明かし。裾は重ねぬ小夜衣。重き其身を忍ぶさへ。我が身一つの命ならねば。〳〵と。思ふばかりを。譯の世にながらへなく〳〵畏る。ナホス㌘岩藤は目をむき出して。詞ヤイ小女郎よ。毎日々々此年寄に。世話をかける横着者。駈落ちした左五郎と。不義したであらうがな。そして奉納の小倉色紙も。おのれが盗んだに違ひはあるまい。サア有様にぬかしをれ。㌘といがみがゝれば顔を上げ。身に覺えあることならなん〳〵の誓文。隱さう様はなけれども。知らぬといふが申譯。色紙を盗んで何のまあ。詞いやだまりをらう。左五郎とちえ〳〵くり合ひ。色紙を盗んで賣代なし。小宿遣入りの元手にせうとて。やつたには違ひない。これはまた御無理ばかり。㌘其色紙故にこそ左五郎様の御越度。有所さへ知つたらば歸参さしやんすお身の上。詞さう吐かすが心得ぬ。不義の證據はおのれが懐胎。隱せば爲にならぬぞよ。サ泣いて事が濟むか。吐かせ㌘〳〵と煙管おつ取り。かよわき體をりう〳〵〳〵。襖隔てて彌三兵衛が。詞申し〳〵岩藤様。そりやあんまり。何が餘り。奥向きの事こなたが知つた事ぢやない。すつこんでゐさしやれと。㌘又も煙管にばつた〳〵。親は我が身を打たるゝ思ひ。襖一重が七重八重かさなる責苦うき雛儀。モウ堪忍とばかりにて スエテどうど伏してぞ。泣き居たる。㌘エ、其吠面が猶憎いと。煙管もまだるく有合ふ箒振上ぐる。其手をしつかとホウ尾上殿。詞コリヤ小糸を庇ふのか。イヤお前様をかばうて。ム、そりや又何故。ハテ小糸もお上のお腰元。若しや面に疵でも付くか。萬一急所にあたつた時は。お前の雛儀と思ふ故。だまらしやれ尾上殿。此詮議はわしが役。急所に當つて死んだらば。ハテお仕置にあふばかり。いらざるお構ひ御無用と。㌘強き言葉も理の當然。さすが尾上も力なくすご〳〵立つて隔ての襖引開くる。ナウ父様か小糸かと。いふに

言はれぬ親子の歎き。岩藤が尖り聲。詞ヤこれ尾上殿。科人に親子の對面なりますまい。其襖さいた／＼。イヤ彌三兵衛殿の願ひの取次。それ故明けた此襖。取次は私が役。いらざるお構ひ御無用と。しつぺい返しに フシしかな顏。地何がな邊り見廻して。煎じ立てたる以前の藥。茶碗に受けて。詞サア小糸これを呑め。エ、これは。ヲ墮胎のおろし藥。エ、。懷胎が嘘なら呑んで見しや。サアそれは。但しは懷胎か。イ、エ。呑まぬか／＼呑みをれと。地髮引寄せせちがふ有樣。親の心は半狂亂。見えぬがましのなま中に。眼前娘の命の瀨戸。此方は情もあらぎの岩藤。彌三兵衛たまらず駈寄るを。詞ア、コレ／＼其敷居越ゆる時はお家の法を背く科人。デモ目前に娘の難儀。ハテ何事も此尾上が胸にある。此願書讀む間。ぢつとして見てござれ。ヲ、さうぢや尾上殿。ヤしぶとい女郎め今の間に。地憂目を見せんと口おし割り。茶碗の藥無理やりに。目鼻も分かず流し込む。小糸が身には熱湯を。呑むよりつらき苦しみに身一つならぬ憂き事の。重なる思ひ幾重にも赦してたべといふ聲も。咽につまりし有樣を見る悲しさは子の百倍。何とせんかとせんと心ばかりに身をあせりわつとばかりに泣沈み フシ前後。正體泣きゐたる。地襟繕うて尾上は立寄り。詞ヤコレ岩藤殿。おろし藥は效きましたか。されば飲めば忽ちおりる筈。ハテ面妖な。ハ、、、。ヤなに小糸。心持はどの樣なや。イエ何ともござりませぬ。すりや小糸が懷胎は僞りに相違ござらぬな。サアそれは。小糸が言譯立つ上は。覺悟しやれ岩藤殿と。地詰めかけられてア、これ／＼／＼。詞こなたは氣が違うたか。此婆には何科あつて。ヤア科のない事言はうか。墮胎の藥は天下の法度。何所から求めてござんした。サアそれは。人を損ふ人非人。地覺悟召されと言ふより早く。襟髮取つてもんどり打たせ。又立ちかゝる脾腹を一あて。庭にどつさりころ／＼／＼。フシ心地よかりし有樣なり。地彌三兵衛庭に駈けおりて。憎さも憎しと引立つるをア、コレ聊爾せまいぞ。詞其氣を付ける藥は癸にと。地摺替へ置いたる以前の毒藥手に渡せば。畏つたと水鉢の。杓にうつして口押割り。流し入るれば目をぱつちり。夢見た心地に起上れば。尾上は詞改めて。詞正氣付いたか岩藤。今日よりは長のお暇。早く舘を立つていきや。彌三兵衛殿のお願ひは奥樣へ伺はん。地小糸ござれと大やうに フシ打掛さばき彌三兵衛親子。不審晴れねど尾上樣。詞御前宜しうお取置きヲ、お次に暫く御休息。小糸はこちへ。軈て吉左右地

松の間の フシ襖押明け別れ入る。地跡に岩藤恨めしげに。悪の報ひは覿面に廻る薬の腹わたを。引つくりかへす苦しさに。アイタ。〳〵と目顔を顰め。のたくり廻る其所へ。尾上が指圖に下部ども。割竹てん手に日頃の憎さ。笑でこそと口口に。詞コリヤ老耄め立上れと。叩き立てられ。コレ〳〵。今迄の朋輩中。ちつとはよしみも。何誼み。澤山さうに呼使ひ。むごい目見せた其代りと。地情容赦もばつた〳〵。打立てられし羽抜け鳥。フシ見返り〳〵出でて行く。地いとゞ短き冬の日の。早や暮過ぎて奥御殿様子。聞かんと彌三兵衛が。庭の切戸に彳んで。詞ハテ心得ぬ娘は慥かに懐妊と。思ひの外のおろし薬。情ある尾上殿の言葉といひ。地ハテ不審と獨言。手燭片手にしづ〳〵尾上。小糸を後に押しかこひ邊り見廻しそろ〳〵と。庭に下り立ちフシ切戸の外。地小糸を突出し彌三兵衛殿。詞お願ひの通り小糸はお暇とや。地ハヽヽ有難やと手を合せ。見合はす灯影蠟燭のしんは泣寄り親と子が フシ悦ぶもまた涙なり。詞アコレ禮をいうてゐる所ぢやない。可愛い男の行方を尋ね。恙なう身二つに。エヽ。スリヤ最前のおろし薬は。ヤレちつとも氣遣ひなか橋の。まきや薬の實母散。エヽ。忝い

第三　中の町の段

騒ぎ明花に遊ばゝ日本堤や衣紋坂。江戸町すみ町素見の地廻りひけ四ツ鐘四ツきんきんきのじ屋有難山屋の豆腐でやうわり向ひ酒。わい〳〵のわいとさ。程太夫 詞サア申し山様。お一つお上り。内匠太夫ヲヽ呑む〳〵。それはそうと此花唉や。半時九郎兵衛もモウ來さうなものだなア。程ハイ〳〵もう。追付けお出でござりませう。エヽ扨と申し山様。シテお前様は。マヽどなた様に。内匠ハテさて誰の彼のといふ段ぢやないわ。五平太が氣にさへ入れば。直ぐに受出しおかみ様。それに何のかのと喧しい女郎ども。客がさすといはゞ此五丁町は此山住皆知つたものおれに逢ふ女郎はないと。達太夫 地いへば藝者の琴野が口まつ。詞又万八をいひなんす。お前の様に女郎様方を一切れ買ひになんすはきつい野暮。ちつと意氣な所を覺えなんし。内匠エヽやかましいわい。氣に入らぬによつて買放しならばおれが氣に入つて見たがよいと。程 地いへば幇間が。詞アヽ申し〳〵一度で行かぬは客の恥。二度で行かぬは女郎の恥とやら申します。いゝえいなア權様。アリヤ床花が惜しいのさ。内匠エヽいま〳〵しい何ぬかすぞい引退れめ横面はりのめすぞ。程ヲツト〳〵琴野さん。ちよつと彈きな。

扨爰で一つ上げますが。大谷の廣治でござります。 唄雨の降る夜はな一入床し。 詞有難い。 程エ、次は嵐雷子でござります。 色雪のふる夜はな小幡の里に。 詞三人すごい〳〵。イヤモおそろしいわい。 内匠そんなら此五平太も一節やらずばなるまい。 程ヨウこりや有難い。さらば聽聞仕らうか。東西々々。 内匠 地愛護の若に二世までというて別れて其後は文もとゞかず顏も見ずそれさへ今は其人も舘を出でて比叡の山 淺ヲ、モいつそ調子が合はぬわいな。 内匠エ、けちな三絃ぢやなア。ム、聞えた上方節だによつて受取れぬなよいわお駒を語らう。心任せにした上でモウ堪忍をしてやると。いうて堪能しかられたんのう。 詞ア、それは流行歌ぢやわいな。 内匠ヲ、ほんになア。エ、われが彈きやうが悪いゆゑ飛んだ所へ連れて行くわい。そして最前呼びにやつた幇間の左七とやら。モウ來さうなものゝ。 程イエ申し山樣。何故にアノ左七を。其樣にお待ちなされます。 内匠サレバサ彼奴は身どもと元は朋輩。神原左五郎と言つた奴とら打つてしくじり。この吉原に幇間してをると聞いた故。呼付けて困らしてやらうと思うてさ。 程ハテなあ。道理で人柄のよい男と思うたと。 淺 地いふに琴野が。 詞イヤアノ左七樣は今度の俄の囃子に太皷の役。それで來なんせんのさ。 程ほんになアもう俄も來さうなものとフシ二人 噂半ばへ。俄の囃子遠音に聞ゆるすり鉦太皷そりやこそ來たわと店の端。見物群くづれかゝつてフシ待ち居たる。 地集を制する棒つき。先行燈も華やかに。江戸珍らしき。祇園ばやし。五平太始め末社ども所望々々も聞捨てに。フシ地囃子打つて行過ぐる。 新太太 地向うへ來かゝる半時九郎兵衛。 内匠 程見るより五平太幇間ども。 程 詞申しお頼み申しやす九郎樣。爰でと 新 地頼むにうなづき。 詞俄のはやし一番所望だ。頼人は半時九郎兵衛。頼まれて貰ひましよと 関太夫 いふに是非なく打ちかゝる 拳太夫 隣の簾押しあげて爰でちよつくら囃してくんな。嘘のない本町綱五郎。はやし所望と 地 聲かけられ。 二人あなたこなたの氣を鉦太皷三絃の。どうしてよからうろう〳〵と。 関する内左七が。 詞アゝさう一時に兩方からおつしやつては。私共が大の眩暈。後先を申しては。お互に御不足勝ち。又同じことを二度お聞きなさるも畢竟御無益。爰はわたしが中を取つて。お二人の眞中で囃しましよ。それで双方御料簡と。 地いひつゝ太皷の音色よく。二人よいや〳〵と見物群集。フシちり〴〵ぞめき別れ行く。 内匠 地それと目まぜに五平太が。 新 簾おろせば半時九郎兵衛。 詞幇間の

左七とやらちよつと逢ひたいと。關地呼ぶに是非なく立戻り。詞何の御用でござります。新イヤ外の事でもない三浦屋の花咲毎晩通へど振付ける。聞けば本町綱五郎とやらいふ二才め。深う馴染んでをるとのこと。又手前も其座敷は格別に勤めること聞いた故。どうぞ貰うてくれまいか。關詞ハヽヽこれは又迷惑千萬。お客の座敷勤めるは中間の役。十方旦那のわたしが身。どなたこなたと分け隔ては。新ヤ無いとは言はさぬ。九郎兵衛が頼みかゝつた此返事。聞かぬうちは一寸も動かさぬ。卷イヤ何九郎兵衛とやら。何故直ぐに言はぬぞい。五丁町に名の知れた本町綱五郎。最前から聞いてゐるが。幇間頼んで口説かすとは。通り者には似合はぬ〳〵。新ム、われが本町綱五郎ぢやな。名は聞けど逢ふは初め。卷半時九郎兵衛。新本町綱五郎。卷以後は二人見知つて貰はうと。地江戸の生えぬき男の生粹。フシ詞もさつぱり見事なり。地關左七は中へ分入つて。詞お直に何かの達引は。どちらが負けても意趣のはし。いさこざなしに笑は一番。私が貰ひます。後方までに新ム、面白い。見事汝が此事を。關ハテ扨きざな九郎兵衛様。マア奥で一献おあがりなされませ。卷そんなら左七。花咲を九郎兵衛に。關サ、ヽ何もかも此胸に。新きつと返事を待つて居るぞよ。關先づお入りなされませ。唄戀といふ字は。詞の糸で。結んで。其下心。ナホスフシ村太夫俄見がてら。綱五郎が母の手をひく妹のお房。七年三つの年配も男えらみに肌知らず。袖はとめても何所やらに。本フシおぼこは見えて可愛らし。詞ア申し母様。今の嚊子は面白いことぢやござんせぬか。伊久太夫ヲイノ此年になるまで。終に吉原で俄のはやしといふは。今年が見初め。村サイナ。それにあの太皷打つた一人の人。いとしらしい男ぢやと。關地噂の人は目の先に思案工夫の幇間の左七村見るからそつと戀風の含む目許も。フシ愛嬌あり。伊久地母はそれとも氣も付かず。詞綱五郎も來てゐるであらうが。何所にゐるぞい逢ひたいと。村地いふは幸ひ渡りに船。お房は左七が傍に寄り。詞申し近頃申し兼ねましたが。本町の綱五郎といふ人の。遊んでゐられます茶屋はどこでござります。地御存じならばどうぞ教へて下さんせ。關詞ハイ〳〵則ち其隣の近江屋。わたしも隨分お近付きでござります。村お名はえ。關幇間の左七と申します。村テモよい名ぢやなあ。どこにゐさんすえ。關ハイとつと水道尻に居ります。村お前獨りかえ。伊久コレお房。そんな事は聞かいでも大事ない。ちよつと兄を呼出して。關ハイ〳〵私が呼

出して上げましよと 地内へ這入れば。 村詞テモ氣のよいお方。男振なら氣立てなら。 地物和らかでしやんとして。好いた風ぢやと伸上り。見るうち出づる綱五郎。 卷詞ホ母者人。お房。俄御見物でござりますか。 伊久ヲイノ。それはさうとちと内へも歸らしやれ。昨夕からの流連なら。酒も大方過ぎたであらう。此春勘當許してから。内の事はそなた任せ。ひよつと身上しもつれては。あの母があまやかし。勘當許したばつかりで。よい老舗の商賣を。散々にしたと言はれては。そちは固より。行先の近い此身。死んで未來で親父殿へ。どう言譯はあらうと思ふぞ。 地どうぞ心を入替へて。糸屋の家の續くやう。思案してたも綱五郎と。スエ打涙ぐむ フシ親身の意見。 卷地誤り入つて綱五郎。 詞ハヽ成程私が不調法。ふつつり廓通ひはやめて。 伊久ヤレふつつり止めいと言ふではない。若い者のことなりや。友達中や廓の手前付合ひもあるもの。それ知らぬおれでもないが。此お房も嫁入り時分。どうぞよい處へ片付けて。わしに樂しみをさせてくれ。 村コレ兄様。わしや何處へも行くことといや。そんな事はほつて置いて。アノナ。アノ囃子の太鼓打つた。左七さんとやらいふお人は。お内儀さんがござんすかえ。 卷ムヽイヤありや獨住み。 村スリヤおかみ樣はないかえと。 地味な所へ念押して嬉し恥し母の前。脇目に フシちらすはち紅葉。 伊久 地母は引取り。 詞サお房歸りましよ。晩には必ず戻らしやれと。 地我が子思ひの姥櫻。櫻に疊る花の町跡にも心引かさるゝ フシ娘を連れて立歸る。 内匠 地引違へて花咲が。 詞綱樣々々々々。お前も兼て知つてゐさんす九郎兵衛が。わしを身受けするといふて。追付け手附を渡す相談。聞くと其儘知らさうと。 地思へど吁はぬ勤めの此身。どうぞ仕樣はないかいなとおろ〳〵涙に。 卷詞スリヤ九郎兵衛は。手附の相談するといふか。今も今とて九郎兵衛が一言。もう腕づくと思へども。左七が挨拶深切を。無下にもならず後までにと受合うたが。シテ其手附の金は何程。 内匠アイ百兩でござんすと。 關地いふ内奥より 詞花咲樣〳〵。 内匠エヽ何をいふ間もない。 地後に〳〵と花咲は フシ暇籠押上げ入る跡に。 關詞其百兩貸しましよと。 地投出す顏は。 卷詞ヤアわりや左七。此金はどうして。 關イヤそれには段段譯ある事と。 地邊り見廻し小聲になり。 詞元私は武士の果。大切の小倉色紙を。去年淺草の寺内にて。盗まれたる科によつて流浪の身。其盗人といふは。アノ隣に居る山住五平太。もと私が朋輩。慥かに彼奴が仕業とは思へども。それといふ

證據もなく。付けつ廻しつ親ふ内。傍を放れぬ半時九郎兵衛。サ此奴も素性の知れぬやつ。二人を捕へ詮議せば。色紙の在所明白に知れるは必定。ガサ何をいうても非力の私。力に及ばぬ無念の月日。御用立つ此金は。浪人しても武士のたしなみ。今日の手附の間に合はせ。こなたの難儀を救ふといふも。男と見込んで頼みたさ。此左七が力となり二人を捕へて小倉の色紙。二度我が手に入るやうに。コレ偏に頼む綱五郎殿と。地額を大地に押しさげて。思ひ入つたる。其風情。卷詞いかにも。お頼みの一通りは聞えたれど。女郎のことに金借りて。肩持つたといはれては。どうも此綱五郎の顔が立たぬ。マア此頼みは呑込まれぬと。地財布を取つて フシ投返せば。關地ハツト左七は當惑の胸を極めて綱五郎が。一腰拔いて取直せば。卷是はと恟り止むる綱五郎。關詞イヤ〳〵〳〵。色紙を二度取返さでは。この身は一生埋木の。地花に呼ばれつ色里に。生恥さらす幇間。何と恥辱が雪がれう。生きて甲斐なき我が命放して死して下されと涙ぐみたる心根を。卷思ひやつて綱五郎。詞ム、成程わしを男と見込んで。命に代へての頼み。ハテもうそれ程に思はんすことなら。頼まれて進ぜませうわい。關そんならアノ聞屆けて下さりますか。卷サア頼まれて進ぜるからは。わしもこなんに無心がある。こゝをよう聞いて下んせ。色紙の詮議の相手は侍。一人は名に負ふ半時九郎兵衛。まさかの時は命づく。命を捨つれば家が立たぬ。さつきにも母者人の意見。親の跡を絶やしては折角勘當許された。此綱五郎先祖へ對してどうも立たぬ。が爰がこなんへわしが頼み。さつきにちらりと見た妹のお房が素振。何とあいつと女夫になつて下んすまいか。關エヽ。卷サこれ家をさへ繼いで貰へば。假令命を打ちやつても心が殘らぬ。突込んで色紙の詮議。命にかけて取返して進ぜましよ。關エヽ有難い忝い。さうおつしやることならば。いか樣ともお詞に從ひませう。さりながら私が難儀に付けてお前の命に及ぶ事を。卷ハテ何のいの。モ頼むといはれちや一寸も。引かぬが老舗の綱五郎。九郎兵衛であらうが。侍であらうが。氣遣ひちつとも仲の町。ヤコレ落着いて居なさいと命は。地譯塵大丈夫 フシ江戸の育ちぞ頼もしき。關詞そんなら此金親方へ。卷イヤサそれでは此男が。關其處は幇間が取計ひ。首尾よく色紙のかへるまで。矢張りわたしは幇間の左七。地綱樣後にとぢんぐ〳〵ばせより。揚屋を フシさして駈り行く。内証地際を見合せ駈出る花咲。詞相も變らぬ九郎兵衛が。身請けの談合わしや

氣が揉めてなりやんせん。左七様の心ざしお前は受けて下さんしたか。卷されば いの。それに付けて隣の侍。五平太めは矢張りゐるか。内匠イヽエ五平太はたつた今裏の方から大門口へ。卷地ヤアそれやつてはと駈出すを。内匠裾に縋つてコレ待つた。詞氣相かへてコリヤ何所へ。様子聞かねば放さぬ〳〵。卷地ヤア面倒なと突飛ばし跡を。慕うて三丁追うて行く。地早引け四ツに地廻りの。往來も絶えて日本堤。鼻唄謳うて五平太が。卷歸る跡より綱五郎。小腰かゞめて。詞申しお侍様。ちよつとお待ち下さりませ。内匠ム、待てと留めたは何やつだ。卷イヤ綱五郎と申す者でござります。が其許様は。山住五平太様ぢやござりませぬか。内匠成程身どもは五平太ぢやが。其綱五郎が何の用。卷イヤ外の事でもござりませぬ。其許様は小倉色紙を。御所持なされてござるとの噂。何と率爾ながら。ちよつと拜見仕りたい。内匠ム、イヤ身ども覺えないわい。卷イヽヤないとは言はさぬ。淺草寺の寺内に於て。内匠何がなんと。卷ヘヽヽ。どうぞお見せ下さりませ。内匠こいつ馬鹿なことをいふ二才め。酒に喰ひ醉つたか。エヽ聞えた。覺えないこと言懸け金でもせうといふ腹だな。惡く騷ぐと其分には赦されねど。爰は場所が惡い。サそこ退いて通せ。卷イヤ通すまい。足元の明い内。きり〳〵色紙を出さいでな。内匠奴は言懸けひろぐな。身が懐中に色紙がなくば何とする。卷ハテ前先見ぬこと言はうかい。色紙がなくば此體存分にならうわい。内匠面白い。しかとなれよと地詞詰め。内懐まで明けひろげ。詞サアどこにある。卷ヤ。内匠サ見ぬかやい。兩の袂にや紙屑もないぞよ。卷サアそれは。内匠ヤ大泥棒めがと。地髪掴んで土に据付け。詞よく太平をぬかしたな。どの口からぬかした。マ此顧か。ヤ此腮たか。エヽ白けたしやツ面。見るもなか〳〵いま〳〵しいと。地刀の鍔にて眉間くわつしり流るゝ血汐。卷詞ヤわりや男の面に疵付けたな。内匠ヲヽ付けたりやどうする泥棒めと。鍔も碎けと續け打ち。卷もうこれ迄と綱五郎。ひらりと拔いたる刀の光。内匠肩先ずつかり五平太が。拔合せてて〳〵〳〵。打合ふ光は闇の夜の。星か螢か電光石火危かりける。卷次第なり。地初めの深手に漂ふすきま疊みかけ〳〵。乘りかゝつて綱五郎。咽吭ぐつと止めの刀ッシ心地よかりし有様なり。新地うそ〳〵來かゝる半時九郎兵衛。卷様子聞くとも白刃の血刀。襤褸の片袖引きちぎり。血押拭うて投げやる後。新そつと拾うて歸るとも。卷知らぬ綱五郎溜息つき。詞慥かに

色紙と思ひの外。ムヽ扨は氣取つて九郎兵衛に渡したか。地何にもせよ此死骸。フシ人に見せじと見廻す所へ。新地提燈さげてあの屋十兵衛。火影にすかして見合す顔。詞綱五郎ぢやないか。卷伯父者人か。新地提燈吹消し一散に闇は。二人あやなし。三皿

第四　糸屋の段

地繁昌の。町は八百八町なるオクリ其中。中に取分けて本町二丁目中根屋と。暖簾古く老舗たる。店には母や娘のお房。手馴れし業も糸によるオクリさゝがに。ならで夕暮のギン空に焦るゝ花嫁は。散る事知らぬ入相のフシ鐘待ち兼ぬる風情なり。地表へいそ〳〵此家の伯父。唐棧留の袴さへ昔渡りの狡猾親仁。あの屋十兵衛に付添うて。左七もあぢな縁の糸結ぼれし身も紛失の。色紙の行方詮議のよるべ聟と呼ばるゝ昨日今日。町の目見えを引連れて。歸るを見るより母娘。詞コレハ〳〵十兵衛様いかいお世話。伯父様きつい御苦勞様と。地挨拶あいそいつよりも增さるフシ思ひを目の色に。地出さぬ綱五郎奥より出で。詞これは〳〵伯父者人。お年寄の御苦勞千萬。町向きは濟みましたかな。ヲヽ濟みました〳〵。イヤ何妙閑殿。これにゐらるゝ左七殿はお房がきつい戀聟。アコリヤうつむくな。何も恥かしいことはないわいやい。所に氏素情も正しい人と。兄綱五郎の合點づくで。昨夕さらりと祝言の盃も濟んで。女夫は寢間へ還入る。お袋も休ましやつた跡で。綱五郎がおれへの頼み。勘當のうち流浪した加減やら兎角病身にござる。幸ひ左七をお房に見合はす上は。家相續は氣遣ひない。わしも安堵しましたれば。ついでに明日町の名前も。讓り替へて下されと事を分けておれへの頼み。幸ひ今日は町の算用寄合ひ。左七を連れて町中目見えの上。讓り替へも濟み帳面も改めました。成程々々其事は今朝もちよつと聞きました。ハテもう脊丈伸びた此お房。餘所へ嫁入さすれば兄の物入り。五年六年内を出て。うき艱難しやつた綱五郎。兎角アノ子の心任せにしてやつて下さりませ。兄や娘や聟殿の。手にかゝつて介抱受け送られうと思へばこんな嬉しい事はござらぬ。わし程果報な者はないと。地悦ぶ親の心根を思ひやる程綱五郎。明日をも知らぬ我が命と。知られぬ母のいたはしやと。ひし〳〵胸へあたりの人目。まぎらす煙草の煙より。敢果なき此身と喰ひしばるフシ吸口。かみ割るばかりなり。地知らぬが花聟左七も挨拶。詞不思議の御縁で親子の約束。モ何にもとんと存じませぬ私。とかく宜しくお指圖

をお頼み申上げまする。ヲヽ此十兵衛も年寄つて子とてもない身。此方からも頼みますぞや。エヽ聞けば生れは上州とやら。イヤもう斯うなるも皆前生の因縁づく。エヽかう言やあぢな言分ぢやが。親も子も義理ある中が猶大切。お袋も是からは此左七殿を。綱五郎ぢやと思うて可愛がり。ハテ其位に思はねば。隔てに親子は順熟せぬもの。又綱五郎は勘當許さぬ昔と思うてない者にして居やつしやれ。ハヽヽア、とつともう餘り目出た嬉しうて。何やらいかう理に入つて來さうな。サヽこれから奥へいて。打解けた盃しませう。ヲヽそれ〳〵昨夜の殘でコレお房。アイ〳〵ほんに御苦勞休め。伯父様に酒一つ。兄様お出で。左七様。地こちの人さへ言兼ねてまだ恥かしき初女夫。フシ打連れ奥へ。入相過ぎ。地空の雨夜の暗きより。心の暗き半時九郎兵衛。門口より聲高に。詞綱五郎内にかと地いふを聞付け出る戸口。顔を覗いて。詞ムム面はこれまで見知つて居れど。物いふたは一昨日初め。がマ何と思うて此方の家へ。イヤ別の事でもない。一昨日からわれに逢はうと跡追うて廻つた。が大方家にゐようと思うて來た譯は。此間われが取つた花咲が手附證文。何とおれに呉れぬかい。ハテ仰山な。高が女郎の出入り。其様に聲高に言はいでも。やる筋なれば此綱五郎未練は殘さぬ。さつぱりとやる。が又やるまじき筋なれば。金輪際ようやるまいわい。ムヽコリヤ尤もぢや。そちも大枚の金。百兩といふもの出した手附證文。只貰はうといふでもない。コレこれで貰はうと地懐より。取出すは血汐の片袖。見るよりはつと綱五郎。身の一大事二つには母に聞かせじ知らせじと。心は千々に塞がる胸。詞ヘヽヘヽヽムヽ何と結構な代物であらうがなア。サいやと言や代官所へぢや。アヽこれ九郎兵衛。成程望みの手附證文。われにやらうが。明日まで待つてくれ。エヽならぬわい。待つくらゐなら又外に。結構な代物があれど。急に金にならぬ故。モ明日のことはさて置いて。一時も待たぬ半時九郎兵衛。ぐづ〳〵ぬかしや此袖が。たつた今代官所。サ否か。應かの一口商ひ。きり〳〵ぬかせと地憎體も。握つた證據に腰強く。弱身へ付込む。フシいがみ面。詞ハテモさう言やりやを是非がない。證文は渡さうが。褊衿の事は命づくぢや。命はちつとも惜まねども。今死ぬるまでも母者人の耳へ入れともない。コレ爰はわれも男づくぢや。何と河岸まで歩んでたもらんか。其上で證文と。其片袖とを引替へに。ムヽハテもう證文さへくれる氣なら。それ程の事は不承しよ

うわい。サア來い。地來いと先に立ち。無理の理詰めもそでないと。言はれぬ血汐の片袖に。道理が負けてしを〳〵とオクリ伴ひへ河岸へと行く空の。地親ならぬ。親の心の闇ならで。義理の子故に迷ふ身の。道さへ暗き町筋をオクリ尋ね。尋ねて石塚彌三兵衛。小糸を連れて提燈の小オクリ火影に。すかす門の口。絶えて程經し老人のフシ心覺えに打頷き。戸を引明けて上り口。頼みませうと訪ふ聲。母は聞付け一間を出で行燈差寄せどなたぞと。親ふうちにしづ〳〵と。娘を伴ひ石塚彌三兵衛。詞ホヽウ久々中絶致せし某。お見忘れも御尤も。召連れたるこの娘は。藁の上より養子に貰ひし。上州赤城の家中。石塚彌三兵衛で御座る。ホンニ誠に。これは〳〵とんとお見忘れ申しました。マ何と思うて殊に夜に入つてのお出で。マア〳〵〳〵是へお通りなされませと。地奥底もなき挨拶に。フシ上座に通れば母妙閑。血筋ゆかしき我が子の傍。詞ホヽ産落した母なれど。藁の上から養子にやつたそなた。モほんに我が子ながら初めて逢ふも同じ事。ヤレ〳〵マア美しうよい器量に成人しやつたなう。親御達の育てのよさと思はるゝ。コレ〳〵マちと仰向いて顔見しやいのと。地餘念なき母娘は只。フシ差しうつむいて答なし。地彌三兵衛詞改めて。詞イヤこれお袋。はる〴〵と尋ね參つた仔細といふは別儀でない。様子あつて此娘。實の親御へお戻し申す。エヽそりや又何故でござります。サレバ。二十年の今日の日まで。實の親より大切に孝行にしてくれたも。縁なきことは力なし。というて娘に芥子程も科はない。様子は彼に聞かれよと。地湿り勝ちなる詞のはし。詞ムヽお怒りの體もなく。御不便におつしやりながら。實の親へ戻すとは。ハテ心得ぬ。コレ娘。様子はどうぢや。サいうて聞かしや。早う地〳〵とせつかれて。小糸はやう〳〵顔をあげ。藁の上から二十年の年月育てあげられし。大恩のある父様に親子の縁は身を切るより。つらい悲しい憂き思ひ。まだ其上に恥かしや十月のお腹を苦しめし。産の恩ある母様に又苦をかけに戻されし。切ない苦しいわたしが胸。あけて言ふのもフシ恥かしながら。詞母様。わたしやお屋敷の御法度を背いたわいなア。ヤア〳〵何といやる。御法度を背いたとは。扨はそなたは不義しやつたのアヽこれお袋。不義なればサ命がない。そこを存じて何にもいはぬ。サ其言はれぬ病ひの相手は。不慮の儀に付き御暇。今この江戸にゐるとのこと。聞くと彼めが癪の種。其上に早や七月。屋敷の内で産み落さば。間敷とてもなき小身の某が

住居。お上へ知れたら娘も孫も。いぢらしい目を見ようかと。それが不便さ可愛さに。地二十年來手塩にかけ。蝶よ花よと樂しみし。たつた一人の此娘を。緣切つて返しに參る身が心。どの樣にあらうと思はるゝ。詞ア町人の身分ならばな。早速聟よ舅よと。取結びもあるべきに。地刀差す身の情なさ。召連れまゐる道々も。彼が姿を見るに付け。何の因果で是程まで。育て上げたる娘に別るゝことぢやと思ふ程。一足歩めば二足跡へ。寄る年の身の便りなさ。子といふものゝあればこそ。忠も盡せ義も磨け。一人娘に引別れ。何樂みの扶持知行。淺ましの武士やと。表を立てて何事も言はぬといひし詞の下。取亂したる恩愛の。涙は武士も町人も。別に變らぬ忍び泣き。母も涙に娘は猶。有雛涙名殘の涙涙々は玉川の フシ六つの袂を。絞りけり。地彌三兵衛は泣く目を拂ひ。詞ハアこれは武士のあるまじい未練の涙。お袋の手前も面目ない。シテ御子息綱五郎殿はお留守よな。御歸宅の節よきやうに賴み入る。ヤなに小糸。いふまではなけれども。若しかの人にめぐり逢はゞ。それとても貯へなき浪人の身の上。假令袖褄結んでも。裏屋長屋の住居するとも。貞女の道を忘るゝな。無事で暮せよ。お袋さらばと地いひ捨ててしづ〳〵立つて表の方。見返りもせず フシ出でて行く。地是なう暫しと駈寄る戸口。外からぴつしやり立切る緣別れて。フシこそは立歸る。地跡は親子が詞さへ。スエテ泣き連れ歸る雁の音も。おぼろ〳〵に春の夜の。ホフシ霞が埋む鐘の聲。地母は娘の傍に寄り。詞コレ小糸。何もきな〳〵と思やることはない。世間にない習ひぢやなし。そしてほんに姉のお房。姉妹とはいふものゝ二十年振りでの名乘合ひ。また近付きにする人がある。昨夜姉のお房によい聟とつての。それは〳〵よい氣な人。ほんに明日まで延ばすもどうやら異なもの。マア〳〵今夜引合はせう。姉や。お房。お房と呼ぶ聲に フシアイと答へて姉お房。一間の內より立出でて。詞ヲヽ母樣許して下さんせ。昨夜夜の更けた加減か。酒が廻ると伯父樣も御寢なる。わたしも左七樣も。アノ四壘半でふせりました。そしてアノそこにござる女中樣は。どこから見えたお客でござんすえ。ヲヽ我が身としたことが。いかに昨夜の草臥ぢやとて。さつきにからのもや〳〵。二人ながら根から知らずか。知らぬかとは何事ぢやいな。さればいの。こゝにゐやるは二十年以前。藁の上から養子にやつた。そなたの妹ぢやわいの。マア〳〵樣子は長いこと。養父石塚彌三兵衛樣が。たつた今連れて戻しにござつたわ

いなう。エ、そんならあの子が妹でござんすか。地ナウ懐しやと駈寄れば。姉様かいなと手を取合ひ。親は泣寄り姉妹が。何に付けても目にうるむ。フシ涙は女の道具なり。詞ヲヽ妹何にも氣遣ひに思やることはないぞや。綱五郎様といふ慥な兄様ある上に。昨夜ごさんしたこちの人。左七様とてそれは〳〵氣立てのよい。モウ〳〵〳〵母様の前で言ひ難いが。其モウ男のよさ。そなたもわしにあやからしてあんなよい殿御持たす程に。何にも案じることはないぞや。ヤアノ母様え。左七様起して。此子に近付きにせうかいな。ヲヽ聟殿も眠むたかろが。ほんの里子の戻つたやうにうひ〳〵しうしてゐやる。左七殿にも引合はして。此母が頼みませう。ちよつと起して呼んでおぢやと。地詞の内に姉お房。一間へ入つてよい男持つた自慢を今逢うた。妹に見せる鼻の先行燈の火に見合す顔。詞ヤアお前は。アヽこれ〳〵。サコレ妹御。何もかも一間で様子は聞いて居りました。何にもマア今晩はおつしやるな。不思議の御縁でこなたの内へ参るからは。兄弟同然のこな様の身の上。身に引受けてお世話致す〳〵。お身の上の色話しには。お袋や姉御の傍ではさし合ひもあるもの。ナコレ何事も推量致して居りますると。地目まぜで留められ詮方も。いろてよいやら悪いら。憎い中にも可愛い男。スエ差控ゆれば。それぞとは。フシ知らぬが佛母と姉。詞ヲヽ聟殿よい推量。身最屓をするやうなれど。モ若い時にはある習ひ。モ思ひも寄らぬ面倒な小姑が。どこからやら戻つて來たと。うるさうも思はしやろが。こな様の妹と思うて。遠慮なう呵り廻して下さりませ頼みます。わしやもう何かの氣草臥れ。奥へ行て休みます。若い者は若い同士。コレ小糸。聟殿や姉にも何かの譯を話しや。ヤそれはさうと此綱五郎。又どこへぞ行きやつたさうな。アヽ薄着して風引かねばよいが。ほんに苦のやむ隙がないと。地兎に角物を思はする子故にかこつ我が居間へ。フシ入るや入るさのつぎ穂なき。左七小糸は顔と顔。あけて言はれぬ。もつれ糸。地お房は立つて押入れの蒲團。とり出し敷枕。詞今宵は伯父様もお泊り。妹も奥に寢やるであろ。どうやら奥は氣が置かるる。サア左七様。二階でお前と私は寢て。地誰憚らぬ一つ夜着。詞サア〳〵妹。そなたも早う母様のお傍へ行てもう休みや。地サアごさんせと嬉しげにいそいそしたる姉娘。詞エヽ何のこつちやいな〳〵〳〵。ホンにあたお目出度い。あた阿呆らしい。又聟様も聟様。こんな處へ聟入りするといふ様な事が。マ

何處の國にあるものぢやいな。コレ〳〵妹なに言やる。こんな處と卑下しやるは尤もぢやが。今宵からはこちの旦那殿。そなたもどうぞ主の世話になつて。又主のやうなよい男。地持たしてやらうと又しても。男自慢が口先へ。出るに付けても。燃上る胸の焔のやる瀬なく。詞嫌でござんす。何のよい男の何のとて。人の心を思ひやりもない。畜生のやうな。猫のやうな犬のやうな。モほんに〳〵わしや嚊付きたい。地喰付きたいと袖を喰ひしめ。喰ひしめて身を顫はせし腹立ち涙。道理と思へど此場の仕儀。いふに言はれず胸板に釘鎹を。フシ打たるゝ思ひ。地悟られまじとコレお房。詞二十年も育てられた父御に別れた水離れ。こりやきつい疳癪と見ゆる。それ黒丸子でもあるなら白湯も一口持つておぢや。早う。地早うに何の氣も。付かぬおぼこの姉娘。フシ奥へ行く間を待兼ねて。小糸は左七にしがみ付き。聞えぬわいなと泣出す。口に袖あて。詞コレ聲が高い。譯を語るもせつくるしい此仕儀。コレ紛失の色紙詮議の間。そなたの爲にも實の兄。綱五郎殿の情にて。暫しよるべの此聟入。胴慾な者。聞えぬ者と恨むは重々尤もなれど。妻をそなたの親里とは夢にも知らぬ此左五郎。さりながら。昨夜の祝言今日の讓り。一旦綱五郎殿へ契約の義理を立つるも今宵一夜。今夜中には色紙の在所も知れる筈。コレ暫しの事と辛抱しや。殊に又アノお房が心ざし。これとても捨てられずと。地詞に小糸は恨み泣き。詞左五郎樣。聞えませぬ。地ソモヤ二人が馴初めをいふは今更愚痴なれど。去年の彌生の雛祭桃と。サハリ柳の女夫花美しいというたのを。目で合點して其時に。柳の糸の名によせて。わしは三千年かはらぬと花によそへて謎々を。とく下紐の結ぼれて。お身の離儀の憂き別れ。只ならぬ身を胴慾に。何のいなせも。音信も泣いてくらせし憂き月日。聟入せねば色紙の詮議。しられぬ事でもあるまいに。たつた一夜か二夜さの姉御の心ざし捨てられぬとは餘りな。移り心と取付いて恨みフシかこつぞ。道理なる。地左七は只ハアハアと手當るやうにお房が手前。奥を見やりて立つつ居つ。うろつく中に姉お房。フシ茶碗片手に黒丸子。詞サア〳〵一ぺん尋ねて取つて來た。白湯も沸して來た程に。地一口呑みやとさし置けど。腹立ち涙に身を投伏せ。正體なければそれぞとは。露知らぬ身の氣も付かず。詞ヲヽコリヤもう餘程きつい癪。今さはつたら惡からう此儘寢かして置くがよい。モウ夜も更けた左七樣。地サア〳〵ごんせと手を引かれ。何と詮方見かへる聟。何の心

もなまめく姉。身を顫はして泣く妹。三人三つの金輪の火上る。(二階は燈火も。いとしめやかに見えければ。小糸はあるにもあられぬ思ひ前後。不覺のうらみ泣き。詞千の万のというたとて。姉様の事なれば所詮此家で添はれぬ縁。とはいふものゝ左五郎様。變りやすいは男の癖。ひよつと私に愛想がつき。姉様とこの家で。一生添ふといふ様なひよんな氣にならしやんしたら。わしやマア何とせうぞいな〳〵。ヲ、さうぢや。生きて憂き恥さらさうより。憎い男へ面あてに。地死ぬると覺悟極めても。又引かさる我が夫のスエテ心は何と白紙や。相の山カ、りのべに。今置く露涙。口紅粉筆の我とわが。思ひ血を吐く時鳥。ナホスフシ月がないたか一聲も。哀れを添ゆるものとては夜半の。嵐のしみ〴〵と。身にしむ母の恩の程。思ひ續けて綱五郎。九郎兵衛に契約の時刻は今宵明六ツの鐘はかねての生死の境。今一度母に今生の。暇乞ひをと我が家の軒。戸を引明くれば驚く小糸。詞誰様ぢや今頃に。どこの人ぢやと。地書置を袂へ隠す。フシ顔形。地ぢろ〳〵眺め綱五郎。詞ム、どこの人ぢやと言ふこなたはどうやら見た様なが。マアこなたは何所の人ぢや。アイ。わたしは爰な娘でございす。ヤ何ぢや娘ぢや。アイ。そしてお前は何所のお人ぢやえ。わしかえ。わしは爰の息子ぢや。エ、そんならお前が兄様。綱五郎様でございすかと。地いへど不審の一間より。詞ヲ、合點が行くまい綱五郎。戻りやつたかと母妙閑。地一間をとつかは立出でて。詞ヲ、不審は尤も。コレ此娘はそなたの妹。藁の上から養子にやつて今の名を小糸。譯はゆるりと明日でも話さう。ム、すりや。石塚彌三兵衛殿へ養子にやつた妹。マア〳〵何はともあれ息災で嬉しい。ヤそれはさうと母者人。少し話したいこともあり。コレ小糸そなたも草臥れてもねやうし。奥へ行てもう休みや。アイ。サ、、、。アイ行きや早う〳〵とせり立てられ。長地休む心は泣く〳〵もたゞ眠かゝる二階の方。思はじ見まじと思ふ程。思ひやる瀬も夏の虫。我をこがせる煩悩の。暗き火影のねたましく。フシ是非なく奥へ入りにけり。地跡打見やり綱五郎。母の傍へさし寄つて。詞ヤコレ母者人。ちと無心があるが聞いて下さりませぬかい。ヲ、あの人としたことが。親子の中に無心とは何事。ぢや。アいや外のことでもない此綱五郎。又勘當がして欲しい。ヤア何といやる綱五郎。尤も若氣の廓通ひ。死なしやつた親父殿の堅い氣で勘當をさつしやつたも。ほんの塩踏ますため。追出した其跡で母が案じは幾世の思ひ。五年

六年泣暮し。漸うと尋ね逢ひ。勘當許して間もないに。又勘當してくれとは。氣が違うたか綱五郎。アいや氣も心も違はねど。ほんの譬にいふ通り。乞食三日すると忘られぬと。勘當許されて家へ戻つて其氣づまり。もう〳〵商賣がうるさうて。家に居ることがいやで。マ、第一こなたの顏見る事が眞から底からとんと厭ぢや。ぢや程に。たつた今又勘當して下され。いやと言はしやつても。どう言はしやつてもこちから親を勘當ぢやと。地投出す詞に母親が。愛想もこそも突詰めた。腹立ち涙聲ふるはし。詞ヤイ冒あたりの不孝者め。是程に思ふ此母に。何が不足で其樣な愛想づかしをよう言ふな。モウ〳〵とんと思ひ切つた。望みの通り勘當する。出て行きをれ。コリヤ忝ないわ。アヽ案じるより產むが安いとあまちやな母者人。くど〳〵〳〵と埒が明くまいと思うたが。イヤもうとんと野の宮。世間が廣うなつたやうな。ヤコレ親でなければお房めも。今夜戻つた小糸めも。兄弟でないほどに。重ねてどこで逢ふとも。物もいふな他人ぢやと言聞かして下されや。どりや是から出掛けうと。地大手を振つて フシ表の方。詞綱五郎待ちや。親子は一世。此世ばかりで又逢はれぬ。母が顏も見もしたり。そなたの顏も此母に。とつくりと見せてたも。エナヽ何といはつしやると。地肝に應へて立留ればば。二階の障子しめ明けに。樣子立聞く掣左七。母はせき來る涙ながら。詞人を殺した科の首綱。親兄弟にかゝらぬやう。妹のお房に掣取つて俄の讓り。其上勘當してくれと言やるそなたの心。又さつきに奥からちよつと見た。九郎兵衞とやらが持つて來た。血に染まつた片袖は。アリヤわしが縫うたそなたの襦袢。エヽサこれ。何ぼ女子に生れても。そなたを產んだ母ぢやわいなう。壁に馬を乘りかけたやうに。昨日から今日の仕儀。其處へ心が付かいでかいなう。ムヽスリヤ。何かの樣子をば御存じか。ハア。地はつと驚く綱五郎。二階も障子を締切る胸板。一間の內より伯父十兵衞走り出でて。詞コレお袋。わしも共々隱したを料簡して下されや。勘當許して間もないに廓通ひの綱五郎。意見しに連れて戻ろと尋ねに行く日本堤。行きかゝつたれば人殺し。怖々ながら提燈で顏見れば綱五郎。コリヤたまらぬ。マヽどういふ譯と樣子問ふ間も人目のこはさ。無理やりにこちの家へ連れて戻り。何かの入譯左七の樣子。マツかう〳〵して與れとおれへの賴み。ハテもう返らぬ事は是非がない。一先づ爰を立退かさうと思へども。言はゞ一軒の主。駈落になつては家が立たぬ。幸ひ左七に

お房を娶せ。聟にしたのも。コレこなたの心を休めうと。綱五郎が孝行。わしも又世を廣う綱五郎かくまふ心町の讓りも濟んだ上。それからは上方へでも落さうと。心を碎いた昨日からのコレこのしだら。死なれた兄貫佐右衛門殿が臨終の枕許へおれを呼んで。コリヤ十兵衛。勘當はしたれども。只不便なは綱五郎。性根さへ直つたら勘當許して内へ入れ。おれに代つて世話してくれと。コレ〳〵苦しい中でほろりつと。涙を滾して目をふさがれた。兄貫の末期の詞といひ。俺ぢやと言うて子とてはなし。甥といふも綱五郎一人。若しや縄目にかゝらうかと。昨日今日も一粒の。菩薩も咽へ通りませぬわいの。地何の因果で此様な。憂目を見せてくれるぞと。歎けば母は正體なく。詞それ程までに綱五郎を。可愛がつて下さるか嬉しうござる忝い〳〵。地がさりとては聞えぬぞや綱五郎。詞人を殺せば科人と。辨へ知らぬそなたぢやなし。明日をも知れぬ年寄つた此母に憂目を見よといふことか。地これを思へば死なしやつた親父様が仕合せぢや。一年跡に生殘り。情ない目に逢ふことやと。母と伯父とが手を取つて。詞十兵衛様。お袋と。地顔見合せて一時にわつと泣出す二階にも。お房が泣き聲段梯子踏みはづすやら落ちるやら。詞情ない左七様が〳〵左七様が。書置殘して二階から。どつちへやら行かしやつたわいなアと。地聞いて恟り綱五郎。共に慌てて十兵衛も。詞ドレ〳〵〳〵マア〳〵其書置を讀んで見やと。地老いのそゞろの身もふるひ行燈提げる手もわな〳〵。土器捲込み フシ眞暗がり。地エ、鈍な人ぢやと綱五郎。勝手へ燈しに行く際に。小糸は一間をしのび足。夫の跡を慕はんと。心あてども潛りをオクリ難なく。〈表へ立出づれば。小屋根に隱れし左七が門へ。ふはと飛んだる妹脊の緣。物をも言はず手に手を取り。軒に忍べば綱五郎。やう〳〵燈し來る行燈。お房がうろ〳〵又ばつたり。詞エ、面倒な。讀むには及ばぬ其書置。此綱五郎が様子を聞いて死ぬる覺悟に違ひはあるまい。今宵中には手に入る色紙。左七が死なぬ其内に取返して渡さねば。折角盡した志も水の泡。母者人さらば。伯父人跡を賴むと言捨てて フシ一散に駈行けば。地お房も夫の行方をと駈出づるを母と伯父。留むる内に外面の二人。道を遶へて妹脊鳥。堺を立つや明六ツの。鐘は上野か淺草か夜明けぬ。うちにと 三重

第五　道行妹脊の組糸

サハリいとしさはいとゞ染込む小紫。色に出でたる江戸鹿子。いふに言はれぬ恩と

義理。戀と情にナホスフシからまれし。うき身を何と。左五郎が。小糸諸共本町の。スエテ糸屋をぬけて出づる夜は。まだほの〳〵の朝霞。見えつ隠れつ行く道の。オクリあてども へいづく。一筋に。二上リ唄繋がれ出でて通り町。三丁過ぎて今の身は。してうにかゝる悪縁の。いかなる業が傳馬町。死出の。旅路の。門出は留めてとまらぬ フシ旅籠町。けはひ化粧も宵のまゝ。長唄髪も艶なき油町お前の目許の塩町にいとしらしさの浅からぬ。タヽキ浅草橋の橋柱。ふちは瀬となる人心。もし兩國の二道な。風に靡くや柳橋。何の變らういつまでも。嘘ぢやないかや茅町の。可愛さを目にフシ森田町。正八幡も往昔の。武士の冥加に盡きたかと憂き事に氣をくろ船町遠日に。それと觀音の塔は五重か三重の。罪深き身に。いとゞ猶。義理の父さん眞實の母様も嘸ぞお腹立ち。國から深い中ぢやとは知らせ給はず姉様の。私を恨んでござんせう。堪忍してとばかりにて。縋り付くのも付かるゝも。涙にくれの朝顔や共に。萎るゝ顔と顔。男も涙にかきくれて死ぬる覚悟に書き殘し。爰までは出たれど色紙を捜し出すまでは。死ぬに死なれぬ我が命しばし浮世をかくれ笠。スエ身の置き所も定らず。そなたは糸屋へ立歸り身二つになり腹な子を。大事に育ててたもいのと。いへば女は縋り付き。サハリ無理は男の辭なれど。タヽキこんな難儀になつたのも。根をたんだへて行く時は。みんな私が戀路からお前に浮世を忍ばせて。何と身も世もありそ海若布かる。磯猿すむ。山家住居も野の末の。月もる宿も。あばら屋も何の。苦にせう厭やせぬ。連れて退くのが嫌ならばとても覺悟を極めた此身。お前の手にかけ今こゝで。殺してたべと取付いてはかなぐど〳〵ナホスフシ口設言。花の街や。花の露ぬれて戻りの酔ざまし。唄三下リうはき櫻はつい風かをる悪性もの。見事に咲いたとな。咲いた櫻を染めたとさ。染めた此紋どうぢやいな。かげ日向。あるのはしんき。つらいもの。梅を心の誓ひに折るとは何ぢやいな。昨日にかはるとさ。明日は筑紫へ行かんすか。留める袂に涙環の。糸による。柳はしんき。亂れ髪。ナホス諷ひさゞめく フシ聲々に。聞沈し行く水の音。大川筋の舟よばひ空しら〳〵と東雲に。すは身の上を人や知る。人や咎めんこなたへと。手に手をとりの諸羽交かあいと鳴けど憎まるゝ。里の鳥の告げ渡る。タヽキ廓の様子をよそながら聞くも。心の力草。ナホス知邊の方にしばらくは。身を寄せ浪や花川戸。花の姿や花の袖。吉左右待たん待乳山吉原。さしてぞ三瓦へ急ぎける

第六　駒形の段

地　聖天町の方よりも息をはかりにえいさつさ。ぐる〳〵巻きの吉原駕。跡からひつ添ふ半時九郎兵衛。駒形堂につく息杖。向うへ人影南無三寶。見付けられなとよけるうち。待つた〳〵と駈來る本町。フシ棒鼻しつかと支へたり。詞コリヤ何とする綱五郎。イヤ何ともせぬ。いかにもわれが望みの通り。百兩の手附證文。襦袢の袖と替へ〴〵に渡したれば。そつちの十分。がおれも又そつちから。ちつと受取りたい物があるわい。ムヽそりや何を。イヤ外の物ぢやない。定家卿の小倉色紙。五平太が手から請取り。われが持つて居ようがな。ヨ何がなんと。イヤサあらがふな九郎兵衛。宵にわれが詞のはし。急に金になりにくい代物と。ぬかしたが此方の聞きかけ。三寸俎板見拔いた綱五郎。きり〳〵渡して貰はうかい。ムヽさうぬかしや面白い。たとへ證據は渡しても。日本堤で五平太を殺し。死骸をどんぶり言はしたまで。黑い眼で睨んで置いた。細言ぬかしやたつた今。代官所へ注進して。三寸繩に締上げさせうか。スリヤどう言うても色紙は渡さぬな。エイワ毒喰はゞ皿な。おのれも生けては置かれぬと。地いふより早く九郎兵衛が。先を取らんと拔放し。切付くるを身をかはし。拔合したる白刄と白刄。光りに悔り駕の者。喧嘩々々と狼狽騒ぎ。フシ駕を捨ててぞ逃げて行く。地こなたは互に身の大事。命限り根限り。疊みかけてぞ三重へ切結ぶ。地強悪不敵の九郎兵衛も。義心の刄に切立てられ。フシのたれ廻つて死してげり。地駕の繩目をやう〳〵に引切り〳〵駈出る花唉。詞綱五郎様。コリヤ何にもいふな。心を付けよと立筈つて。地死骸の懐中。搜り見れども色紙は無し。コハ〳〵いかにと訝る中。こゝに何やら落ちてあると。取上げるを綱五郎。すかし詠めて。詞ヤアこりや質札。扨は色紙を質に入れ。身受けの後金渡したな。これさへあれば氣遣ひなし忝しと押戴く。地後にばら〳〵所の大勢。ヤレ人殺しとわめく聲。砂を掴んで眼つぶし。花唉來いと引立て〳〵。河岸に幸ひ繫げる猪牙船。飛び乘る間もなく櫓を押立て跡しら。波とぞ三重へなりにける

第七　行徳の段

地　下總の。フシ行徳村に住みながら。身に徳もなき貧しさは。持つて生れた盆の窪茂治作といふ小百姓。二畝が見世にぶら〳〵と草履草鞋の紐よりも細き煙の侘住居。岩藤は此家へ敷金持つて後連れと。形も容も變る世もフシ金の光のたか

枕。 地茂治作は徳願寺の回向も濟んでいつきせき歸る我が家の門の口。見れば女房が圍爐端。ふんぞり返る寢姿に。呆れ果ててつこと聲。詞コリヤ嗅。お岩〳〵。エ、マア〳〵背戸門を明けひろげて。何としたどぶさりさま。地起きぬかやいと枕許。つぶやく聲に目を覺し。詞エ、喧しいわいの。背戸門を明けて用心が悪か。何故内にねやらぬぞいの。ヤイ〳〵。おのれマそんな口を利きをるまい。毎晩毎晩夜を晝と。めくりを引きにうせては夜を明し。晝になると縱な事を横たへもせず。おれがちよつと德願寺樣へ御回向に參つてくる内。起きて居ることがならぬかい。アノ爰な地引きずり女子めと疊叩いて フシ腹立ち聲。地お岩はじろ〳〵茂治作が顏を細目に起上り。詞コレべら棒親仁。こなたはコリヤ氣が違つたの。何ぢやと思うて其樣な。太平を言やるぞいの。コレ此おれはの。赤城の奥御殿で。お年寄樣とも言はれた身。何の爲に敷金持つて。こなたの樣な老耄の。何の役にも立たぬくにや〳〵〳〵と。あたしんきな男を持つぞいの。おれが心任せに暮さうと思やこそ。十五兩の未進に詰まつて。ぎつちかはとしてゐやつた金を立替へ。雨が降ると傘さゝねば住まれぬ家を建直したつた一人客があると。產月に氣の付いたやうに。騷ぎ廻つて借りあるく諸道具を買ひならべ見世にアレ少しづつ物を置いて商ひさすは。コリヤマア誰が金ぢやと思やるぞ。皆此お岩樣のお金ぢやぞや。ほんにおれも此内へ來る時は。まだみづ〳〵としたわしが。あんな男を持つといふは。餘程無分別ぢやがとは思うたれど。ア、高がよぼけたひんこ親仁。夜晝おれが血氣に任してせこめたら。半季か一年で見送つて了はうし。聞きや吉原に娘とやらが勤めして。大分よい女郎と聞けば。ほんの無盡をかける氣で。親子になつた誼みには。年が明いたら年切り増し。年が明いたら年切り増し。皺のよるまで勤めさしたら。萬更捨金にもなるまいと思やこそ。貧乏神の神主を見るやうなこなたを。おれが男に持つたぢやないか。サアかういふが腹が立つなら。勝手にしやれ。こなたの身上といふは。油つぎの會所見る樣なアノ佛壇と。對王時代の古葛籠。底の拔けた鍋釜と紙屑籠も一所に脊負うて。今此内を出て行くなりと。貸した金を耳揃へて戻しなりと。二つ一つの返事ぢやと。地口へ出儘の惡口雜言。いひ込められて一言も。もぢ〳〵として茂治作が。律義一ぺん返答も。スエ貧苦をくやむばかりなり。フシ折から來るは。めくり友達。さんまの彦治がぬつと入り。詞ハア、久しい物の。又女夫喧嘩で

えすか。大方親仁殿の口が過ぎたものぢやあろ。かういや婆様の最屓をするやうなが。何もこなたがいふ筋はない筈ぢやて。重ねてからきつと嗜ましやれ。いやコレお岩様。もう〳〵今日はわしが挨拶。料簡さんせ〳〵。そして今夜は蕎麥切屋のこんがてら。お前を連れて暮早早。來てくれと頼んで居た。アレ德願寺の暮六ツが鳴る。エ、そしてまだ内證で。こなんに話して儲けるロもあり。サア〳〵行かうぢやあるまいかと。地人喰馬に相口の。儲けと聞いて顏色かはり。詞ハテもうこなたの挨拶なら。料簡ならぬ所なれど無下にもなるまい。コレ親仁殿。重ねて屹度たしなましやれや。そしてそれおれが行た留守の間に。水も汲んだり。明日の麥もよばして。佛壇の掃除から。買うて置いた鰒も料理して。又それ。戻る時分には。茶も沸して寮所も敷いて置かしやれと。地喚き散らして錢財布片手に提げて二人連れ。伴ひてこそフシ出でて行く。地跡打詠め茂治作が。ロ惜しいとは思へども。勝たれぬものは敷金の。スエ才覺何と泣くばかり。しを〳〵立つて火打箱。打つ石の火のばら〳〵と落ちる涙にしめる炭。漸う燈し佛壇の。佛の箔の薄かりし緣は先立つ女房が。位牌に向ふフシくもり聲。詞コレ嘆。堪忍してたもや。取分け今夜はそなたの逮夜。さぞや草葉の陰からも。いらぬことして後連れ持つて。今にも娘の花咲が。廓の年明け歸つたら。アノわんざんな繼母めが。むごうつらう當るであろ。それも皆おれが心からと。恨んでばかりぬやるであろ。尤もぢや道理ぢやが。モあの樣な根性の。悪い者とは露知らず。アノ今來た彦治が仲人。敷金持つて來る女房と。聞くと其儘後先の。聞合せもせず呼入れたは。未進を立ていと庄屋殿から。嚴しい催促。娘がことをよう知つて。年切り增して金立ていと。在所の衆のすゝめ。可愛相にお咲めに。長の苦界をさす悲しさ。詮方盡きて敷金の。付いた女房入れたも。眞の娘が可愛いさが。地却て仇になつたのぢやと生きたる人にいふ如く。老のぐど〳〵悔み泣きフシ珠數を。こづたふ涙なり。地忍ぶ身は薄の穗風しみ〴〵と。まだ近付きにならねども綱五郎は花咲を。親里に預け置き色紙の在所尋ねんとフシ二人連立ち夜の道。詞コレ花咲。九郎兵衛を殺した場で。手に入つた色紙の質札。在所は知れても請出す。金の才覺するまでは。我さへ浮世忍ぶ身に。そなたの風俗目に立てば。一倍心が引かさるゝ。親仁殿をよう頼んで。隨分人目にかゝらぬやう。暫く身をば隱してたもと。地いへば花咲涙聲。ひよんな私に繫

がれてうき御難儀をさせますと。思へば胸が碎ける樣な。詞貧しう暮してござつても。頼もしい私が父樣。さりながら聞けば此春母樣を。呼びしやんしたとの事なれば。お心知らぬ今の母樣。地お前は大事のお身の上暫く後の辻堂に。待つてゐて下さんせ。詞父樣に私が逢うて。何かの話した上で。跡からお知せ申しませう。ヲヽ尤も。そんなら必ず辻堂に。親仁殿へもよいやうに。地頼む〳〵と綱五郎。辻堂さして引返す。地花咲は父親のゆかしなつかし逢ひたさも疵持つ足のうら若き。フシ戸を押明けて入りければ。地茂治作は看經の珠數繰りさし。詞どなたぢや誰ぢやと見合す顏。詞ヤアそなたは娘のお厌じやないか。とゝ樣久しうござんすと。いふに駈寄り。詞ヲヽマアようおぢやつたの。エヽモそれからとんと便りもなく。どうかかうかと案じてばかり。ヤそれはそうと。今時分に人も連れず。ムヽハヽア何やらそぶ〳〵そなたの樣子。聞かぬではなけれども。今の噂の手前を思うて。齒ぶしへも出さなんだ。そして其。言ひかはした綱五郎殿とやらの事。昨日も今日も談議の場で。餘所事に聞いて居て。心がもや〳〵案じられたが。其お人はどうしられた。アイ譯をうす〳〵御存じならば。お話申すも長いこと。たつた今門口まで。送つて來てゞあつたれど。今の母樣のお心も知れず。マアお前に私が逢うて其上でと。アノ後の辻堂に待合はしてござんす筈。ヲヽそれは出かした。よう氣が付いたな。イヤもうひよんな噂を持つてな。われが手前も面目ない。小さいから苦勞してくれた。其われが惚れた男。命も何も打ちやつて世話する筈ぢやが。サ今の噂めが其根性の惡さ〳〵。こちの内にはどうも置かれぬ。がよい思案があるわい。ソレ。われも知つてゐよ。水戸街道の新宿村に。おれが妹。ナヤわれに言うては埒が明くまい。おれがつい一走りいて。綱五郎殿に逢うて來う。其間留守してゐや。噂めは今夜もめくりにうせて。夜が明けねば戻らねば。マア氣遣ひはない程に。案じずと留守してゐい。地つい行て來ると子故には晴き道さへ。厭ひなく。フシ辻堂さして急ぎ行く。まだ宵ながら淋しきは。本フシ何れ在所の習ひかや。地思ひはいつか花咲が。憂きを喞てる獨言。詞おいとしや父樣の。年寄らしやんしてお氣扱ひ。とつくりとした入譯を。御存じはあるまいし。人殺しの綱五郎樣。どうで遁れぬ天の網。わしも共々死出の旅。覺悟は疾うから極めてをります。今お眼にかゝるのが。一生のお暇乞にならうも知れぬ。何やかや餘所ながら。言ひたい事はたんと

あれどお顔を見ると悲しうて。一つも口へは出ぬわいな。地若しもの事があつたらば嘸ぞお便りもあるまいし。お歎きを思ひやる。不孝を許して下さんせと。憂き身の上や親の事。思ひ綻けし口説き泣き袖は。涙の露しぐれ。地人の哀れは白髪のお岩。見たか知つたか我が家の内。差足拔足立戻り。つつと這入れば花咲は。恟り仰天ワシうろ〳〵目許。詞ア、コレ〳〵〳〵。何にも氣遣ひな者ぢやござらぬ。今そこで親仁殿に逢うて話で聞いた。こなたは娘の花咲とやらか。ヲ、美しいよい器量やの。わしは此春嫁入つて來た。今のそなたの母ぢやぞや。エ、これは〳〵。お前はアノお母様でござんすか。眞の娘と思召し可愛がつて下さりませ。ヲ、あの子としたことが可愛がらいでよいものかいの。取分け小さいから廓の勤め。嘸や苦勞をしやらうと。思へば〳〵悲しうて。ほんに〳〵夜の目も碌に合ひませなんだ。マア〳〵〳〵よう戻つて下さつたと。地猫なで聲もワシ氣味悪く。詞イヤこれお咲や。聞きやアノ。そなたの深う言交した。其本町糸屋の綱五郎殿とやらも。アノ人を殺して駈落をしられたげなの。エ、。ア、これ。何のわしに隱すこと。そなたのいとしがりやる人の事。假令どの樣な事があるとても。命にかけてかくまふ氣。定めて一所に連立つておぢやつたぢやあらう。サア〳〵早う呼んで來て。此母にも逢はしてたも。イエ〳〵〳〵そりやお前の間違ひ。何のそんなことは。ヤイ賣女め。エエいけまじ〳〵とした此面わい。そんなでいく婆ぢやないわい。やい其綱五郎めが殺した。山住五平太といふは。おれが大事の甥の殿。甥の敵注進して。綱五郎めを逆磔。それとも知らずふか〳〵と。うせたはおのらが運の盡き。サア綱五郎めは何所に居る。有樣にいや。アイ。サいやいの。アイ。エ、しぶとい女郎さいめ。どうで斯うせざぬかすまいと。地有合ふ細引おつ取つて。立ちかゝれば花咲が。とやせん方も表の方。逃行く先を立塞がり。詞コリヤ。どこへ行く。よそへ行くなら綱五郎が。ゐる處を知らして行け。アノ爰な横着者。サア。痛い目せぬうち早う言へ。エ、しぶとい女郎めぢやと。地かよわき小腕ぐつと捻上げ。容赦もワシ荒くしばり縄。地ナウ悲しやと花咲が。身悶えしたる叫び泣き。詞エ、胴慾な情ない。地いかにまゝしい中ぢやとてよく〳〵の緣なればこそ。親となり子となるも先の世からの因緣づく。元より知らぬことなれば責殺さるゝも厭はねど。あんまり氣强いかゝ樣と身をふるはして。泣き沈む。詞エ、まだぬけ〳〵と詈

ふかと。地縄先柱にフシくゝり付け。地庭に有合ふ青松葉。圍爐裏へへし込み押込んで。圍扇おつとりはつた〳〵。煽ぎ立てたる苛責の責。婆婆の三途の白髪の姥。眞黑々と立ちのぼる。煙の中に花咲が。阿鼻叫喚の苦みも。夫の爲と胸をすゑ。覺悟はすれど苦しさ辛さ。詞とゝ樣戻つて下されなう。父樣なうも地煙にむせ。聲さへも出ぬ。地獄の責フシ目も當てられずいぢらしき。詞エ、扨もく〳〵性の强い。これでもいはぬか。ドレ〳〵。モウこれから。むごい料理をせざなるまいと。出刄庖丁をおつ取つて。地邊り見廻し有合ふ砥石。ねた刄を合すフシ折こそあれ。地綱五郎を引連れて歸る茂治作我が家の內。娘の泣聲綱五郎。肝に徹へて門の戶を。はつしと蹴破り駈入つて。此體見るより飛びかゝり。婆が首筋鷲掴み。眞逆樣にどうと打付け。縛め解けば花咲が。蘇生つたる嬉しさはフシ何にたとへん方もなし。詞ヲヽよう戻つて下さんした。もちつと遲いと今こゝで。殺さるゝのであつたわいな。ヲヽさうあらう。道理々々。今親仁殿の話には聞いたれど。是程にはと思ひしが。ヤモ呆れ果てたる猫股婆め。花咲が仕返しに。これこれ汝をおれがさいなむ。コレ親仁殿。その荷ひ棒任せ合點日頃の意趣。手傳はして下されとひつ張り蛸の棒縛り。圍爐裏の傍へ引据ゆれば。今の返報花咲が。松葉を圍爐裏へ煽ぎ立て。あふぎ立つれば目を白黑。苦しむ婆の田樂責。フシ心地よくこそ見えにけれ。時分はよしとさんまの彥治。婆樣首尾はとづつと入り。見るより悔りコリヤならぬと。逃出すを引掴み。詞大方おのれも合盜め。地觀念せよと前なる井戶へ。さんぶと打込む水の音。三人打連れをちこちの新宿村へと　三丟

第八　小石川の段

鹿踊武藏野に。フシ一叢薄。穗に出でて。地亂れ合ひたる糸筋の分けていはれぬ戀中の。僞りならぬ本町を。死にに出でしも兎に角に。スエテ死なれぬ命暫くも。義理と戀とに。つながるゝ。駒込邊の小借家を。假の浮世の假住居店借りてきて昨日今日。左七が留守にしほたらとフシ小糸が。長屋呼びあるけば。地忝いと夕暮より。道具カヽリ相借家の物頭身のすぎはひは福の神。大黑舞の樋右衞門。元手入らずに口先で世を淡嶋の權兵衞と。薄い身代吹けば飛ぶ風の神の喜左衞門。三人打連れどや〳〵と。上れば直ぐに座敷やらフシ臺所やら隔てなう。詞御懇に致しましよ。先づ御亭主に近付きになりませうかい。ハイ不躾ながらアノ兄樣は。急な用でちよつとそこ迄出られました。折角お

招き申しまして。不調法な亭主ぶり。地モウ帰らしやんすでござりませう。それまでに御酒一つと。恥かしさうに出すちろり フシ盆に載せたる筒茶碗。地見るより先へ魂は酒はゆなりし呑助達。腰はお留守に淡嶋権兵衛。手早に茶碗とり上げて。詞ハレヤレ〳〵そんならアノ御亭主は。お前の兄御でござりますかえ。ハテ扨なア。わしは又若い女夫の宿這入り。ハア、何でもこいつはお駒才三なぞとやらかして来た。宿這入りぢやなと思うたが。そんならお前は妹御でござりますかいな。シテ見ますれば爰に三味線もござりますが。ちと承りたいなア。ヤ扨何れも御酒が出ました。エ、此長屋の付合ひは。茶碗で一盃切りが定りなれど。が一盃ぎりといふも氣がかり。われら此茶碗で二盃受けて廻しませうヤいづれも早うござるお酌。ハ、、、慮外と地酒追従。一つ受けてぐいと呑み。扨もうましと舌鼓。待兼ね山の大黒舞咽を鳴して。詞サア〳〵〳〵淡嶋殿。お盃頂戴いたさうハア、こりや御造作でござりますよ。見た處が二人ながらいやしう育たぬ人と見えました。隨分と世帯を大切になされ。こちらも此長屋へ來た時分は。それは〳〵苦しい事がござつた〳〵。が大黒殿のお蔭でどうやらかうやら暮しまする。いやマア一つ下されうと。地引受けてぐいと呑み。詞扨もよい氣味。コリヤ御酒に念が入りました池田屋の出か四方の赤そうにござる。アいや風喜先生嘸お待遠。イヤもう先つきにから魂はちろりの中へ飛んでしまつた。マア二三盃續けて受けうと地いけぢな上戸の息なし呑み。詞お酌度度ハ、、お慮外でござります。ヲツト、ト、、ハア、コリヤ鶏を呼ぶやうな事を申した。ちよつとお間を淡嶋殿。イヤモウとんとわれらは二盃ぎりマ一つ呑むと此顔が眞赤に猿の様になりまする。ハテ扨呑むなりをして辭儀する人。其代り此大黒が一番祝儀を見しらしませう。地と甲張つたる聲はり上げ。謡一つ長屋の權兵衛殿。マ一つ參つて猿となる。ハ、コリヤ忝い差詰め此權兵衛。何ぞ一つするのぢやが謡は知らず淨瑠璃は節がいけず。ヲ、あるぞ〳〵えらい事をして見せう。此間見て來た堺町で今流行る輕業。むさん飛びをして見せう。地コレハよかろと相借屋に。サハリのぼし立てられ淡嶋が。着たる紙子の袖なし羽織ひつくりかへす鬱金裏。身拵へする其隙に大黒舞が持つて出る俎板。足纏其上に四方の柄樽を積重ね。風の神が口まつの出放題なる口上いひ ナホス大黒。三味線彈いた〳〵。詞さて東西。いよ〳〵御覽に入れまするが。むさん飛びちん蔵升の上の輕身。發

端がしやちほこ立ち。足頭に付きますれば鶺鴒の水遊び。ハリトウ〳〵〳〵。足升へうつりますれば香爐獅子。手を放し立上りますれば野中の一本杉。其體逆に戻りますれば元の香爐獅子と戻ります。ハリトウ〳〵〳〵。地と口上に。一つもいかぬ升の上。秤の輕業見る如く。家樽碎けてころ〳〵〳〵〳〵。腰骨かまちでどうと打ち。庭へどつさり打ちこけて。物をもいはずぎつく〳〵。小糸も氣の毒かけ寄つてお怪我はないかと撫で擦れば。相借屋もうろたへ騷ぎ。藥よ水よと抱起せば。やう〳〵に フシ人心地。詞アヽ〳〵恨めしの風の神。大黒殿も聞えませぬぞや。おれが仕付けぬ輕業を。留めてくれたら此やうに。腰骨は打つまいもの。アヽ腰いたや堪えがたや。地思へば〳〵。商賣の淡嶋殿も聞えませぬと。恨めしげなる聲音にて。そも〳〵紀州名草の郡加田淡嶋大明神。女中樣方の腰より下のわづらひは。直してやろとの御誓願に此權兵衛が腰骨の折つたをみす〳〵見ぬ顏して知らぬふりはお胴慾な。餘り氣强い淡樣と。醉が廻つてすゝり上げ。しやくり上げたる フシ泣上戸。相借屋は天窓をかき。詞是はさて情ない。又例の泣上戸。ほんにやれ〳〵。こなたの樣に泣く年增が。大根畠にあつたらば。嘸かし時行であらうにと。地仇ロましぐら相借屋。立たぬ權兵衛を肩にかけ。引立つれども足立たず。詞こいつはいかぬいつそ拍子でやつてくりや一つとや一つ長屋の權兵衛殿。輕業しくじり腰拔けたんのう立たれぬたんのう立つ足もしどろへもどろに歸りけり。地侘住居には取分けて哀れを添ゆる初夜の鐘。心もほそき行燈の。灯をかき立てても後先を思ひつゞけて。フシしよんぼりと。詞佐七樣はなぜ遲い。何してゐさんす事ちややら。早う戻つてくれたがよい。住馴れぬ故かして。どうやら氣味の惡い家と。地すみ〳〵詠める女氣の。待つ身になるなかゝる身に形も容も面痩し。フシ佐七は積る。憂き事のうきが。中なる憂世帶。うと〳〵戻る我が家の內。ちらりと見るより走り出でヲヲ戻らしやんしたか待兼ねた。今迄何してゐやしやんした。遲かつた案じたと。地女房顏してちとばかり フシ世帶めかすも可愛ゆらし。ヲヽ道理々々。嘸待兼ねてゐやらう。早う戻ろと思うたれど。綱五郎殿の安否も聞きたし二つには紛失の色紙。行方も知れうかと。あつちこつちと駈歩き思はず夜に入つた。イヤこれ小糸。今更いふには及ばねど。糸屋の家の騷動。ゐるにゐられぬ品になり連れて退いた其時は。死ぬる覺悟に極めたが。色紙の在所知るまでは。どうも死ぬにも死

なれぬと未練に命ながらへて。せうことなしの宿遣入り。アヽモほんに浮世に飽果てたと語るを聞くにいとゞ猶。小糸は浮む目に涙。詞ほんにお前はわし故に。たんと苦勞をさしやんすなう。思へば思へば私ほど親に不孝な者はない。國の義理ある父様に。思ひをかけて憂き別れ。又もや產みの母様の。地お氣を背いて姉様に添うてゐさんすお前と連立ち。退いて二人が此様に。添うてゐるとの取沙汰を聞かしやんしたらさぞやさぞ。姉様のお憎しみ母様のお腹立ち。思ひやる程悲しうて。私はいつそ死にたいと。夫の膝に取付いて フシ隣憚る。忍び泣き。地左七も涙の眼を拂ひ。詞アヽ埒もない事思ひ出し。思出す程留めどがない。千萬言うてもかへらぬこと。さつぱりと思ひかへて。サヽわつさりとしや〳〵。さてまあ斯う宿遣入りをしたからは。何ぞ商賣がなうてはなるまいが。というておれは商ひの事は何にも知らず。ヤよい思付きがあるわいの。そなたは三味線をよう彈きやるが。何といつそ町藝者に出てくれぬかい。アイモ私がやうな不束な三味線でも。役に立つならお前の爲。ヲヽそりや忝い〳〵。したが極めねばならぬ事があるわいの。コレ必ず轉ぶことはならぬぞや。地あれまだあんなじやら〳〵と。お前を置いて。仇枕交す心はないわいな。詞ヲット誤り〳〵。がそれはさうと稽古のため。何ぞ彈いて見やらぬか。コレうさ晴しによかろぞや。アイ私も屋敷で彈いた儘。撥の持ちやうも忘れたが地彈いて見ようと樫棹の。憂きを三筋の糸しらべ。二上リ唄思ふ中にも隔ての襖。あるに甲斐なき捨小舟。詞ヨウ〳〵〳〵こちの女房の命取りめ。何いひぢややらすつきりとモウ手が廻らぬわいな。大事ない〳〵。唄わしは白浪うつゝなき夜の寐覺の其睦言も。思ひ出す程いとしさのぞつと身も世もあられうものか。詞思ひ廻せば姉様の。私を恨んでゐやしやんしよ。堪忍して下さんせ〳〵。唄せめて名古屋の二重帶が。三重廻る。ナホメ詞ヲットよし〳〵。いやモウ一廉の藝者様ぢやわいの。そしてそなたの其振袖今では丁度もつけの幸ひ。長屋の衆の思はくもあれば畫の内は妹と兄様。入相がごんと鳴ると。直ぐに濡事女夫の始まり。これを思へばアノ鐘は暮六ツぢやないぬれ六ツぢや。エヽ何をじやら〳〵てんがう口。サアもう四ツでもござんせう。炬燵に火もよい寐やしやんせぬか。テモせはしない床急ぎ。コレ今夜はわしは精進ぢや。アレまだあんな悪口ばかり。よい加減に置いてなと。地蒲團一つが玉の床。思ひ近江の疊の上浮世の塵をひしき物。割なき フシ夢や結

ぶらん。地妹と脊の流れは同じみなの川。深い淺いの分隔て。姉のお房は戀聟のォクリ左七を。戀し小石川。タヽキ其隱れ家へより糸の。手を引く伯父の十兵衛が心も暗き。フシ小提燈。地尋ねあたりし門の口。詞コレお房。口の長屋で聞いて來た。左七と小糸が隱れ家は。大方こゝに極つた。なま中に案内したら。風をくらうて逃げうも知れぬ。どうぞ仕様がありそなものと。地いそ〳〵話すも二人は氣懸り。戸の際間より差覗けば慥に伯父の十兵衛殿。置去りにせし姉のお房。南無三寶とうろたへ騒ぐ内の物音。十兵衛表の戸をこち放し。這入るを見るより炬燵の内。小糸は何と詮方も。納戸へ逃込む後影コリャ〳〵見付けた待ちをれと。駈上つて引摺り戻しどうど打付け。詞ヤイこな畜生め。犬めふんばり女郎めがおのれ。此間江戸四里四方を。一遍三界尋ね捜した。知れぬこそ道理なれ。爰で尋ね逢うたはおのれ等が運の盡き。お天道様のお知らせぢや。サ左七を爰へ出せ。〳〵。出しをらぬかと、地疊叩けば小糸は只。アイ〳〵〳〵とばかりにて何といらへは泣くよりもフシ外に返事はなかりけり。詞ム、内に居らぬか。留守ならば留守にもせよ。戻りをるまで爰は動かぬ。エヽおのれは〳〵〳〵。マ言はう所のない不義者ぢやぞよ。おのれは。藁の上から彌三兵衛殿へ養子にやつて。育てられた恩も思はず。色事で屋敷をしくじり。親里へ戻つた晩に。マあらうことかあるまいことか。姉聟の左七と色事して。家を駈落するといふ様な又こんな素早い性の悪い女子が。此廣い江戸中にまた一人とあるものぢやないわいやい。夜鷹め。助兵衛め。ほんに〳〵意見するも餘り阿呆らしいて。呆れが舞うて臍が可笑しがつて茶を沸す。其様な不義女郎とは知らず。死なれた親父の佐右衛門殿はな血の尾ぢやとて汝を大體可愛がられた事ぢやない。けれども彌三兵衛殿へ。やらねばならぬ義理になり養子にやられた跡でも。どうぞあいつばかりは。まめで達者で。屋敷で出世をさせたいと。コリヤ伊勢へ七度熊野へ三度愛宕様へは月參りをしられたわやい。それに又聞いては居らうが。兄の綱五郎はな。左七め故に人を殺し。勘當せねばならぬやうになつて。其晩から行方知れず。それにおのい等は駈落とんと糸屋の家はらんちき騒ぎぢやわい。其中でもアレ見をれ。お房はな不所存な。左七めがことを。いひ出しては泣き。思ひ出して泣き。モ泣明し泣暮し。とう〳〵目を泣潰して仕舞うたわやい。おりやモあいつが可愛うて〳〵ならぬ程。おのい等がモ憎うて〳〵ならぬわ

い。いとしいはお袋。いつそ泣きもせずうろ〳〵と。子供の事はかり案じ。一昨日から床に就いて食もいかず。藥も咽へは通らぬわい〳〵。そりや誰が業ぢや。皆おのれが業ぢやぞよ。俯いてばかりゐることはないわい。面を上げいやい〳〵。それにまあおのい等はぬつくりと店借して二人暮そと思ひ居るか。コリヤ天道様といふものがあつて。ヨウ睨かに暮されうかいなあ。サア左七めが事思ひ切つて糸屋の家へ戻すかコリヤ返事をしをれやい〳〵アとはいふものゝ。そつちにも尤もな筋もあろけれどもわれが思ひ切つて左七を糸屋の内へ戻すと。母の病氣も癒ればこそ家も立つ。姉も悦びや目も癒る。合點がいたか合點がいたか。サ、、、合點がいたら今こゝで思ひ切ると言へ。思ひ切るといへ。サぬかさぬかい。コリヤ小糸。どうぞ思ひ切るというてくれと。地嫌しつ嘯しつ理を分けて。いうて聞かせと目に保つ。フシ涙は聲に顯はせり。地お房はわつと泣出し嫌はしやんす左七様。無理に添はうといふではない。そなたに添はして母様のお年の上の御苦勞を。させましともないばつかりぢや。眼が潰れたら猶の事愛想が盡きるは定のもの。疎まれてから去られうよりいつそそなたに美しう。添はせて私は尼ともなりあなたの聲を餘所ながら。聞いて暮すが樂しみと フシいふも哀れな心意氣。地小糸は始終顏をも得上げず。明けていはれぬ身の上を死ぬる覺悟に。フシ胸を据ゑ。詞伯父様のお腹立ち。姉様のお心根。御尤もともお道理とも。申上げう詞がない。私やふつつり思ひ切り姉様に添はせます添はせまするが皆様へ。私が此世の申譯。詞ム、そんなら得心して。左七を姉へ戻してくれるか。ヲ、出かした〳〵。よう思切つた。イエ〳〵地それでは此姉がどうも心が濟みませぬ。詞ハテさて又鈍な事を言出すやつぢやわい。マ、、何ぢやあらうと。此伯父が胸にあり。左七が戻つた上のこと。それ迄奥に待つて居る。サお房。地こちへと手を引いて納戸へ這入る後影。見るより小糸は駈寄つて。蒲團も枕も取つて除け。コレ左七様どうせうぞいなうどうせうと スエテとり付き縋れば。詞聲が高い。最前よりの一伍一什。聞けば聞くほどのめ〳〵と。どうも生きてはゐられぬ仕儀五平太や九郎兵衛を手にかけたは。此左七と書置して。恩のある綱五郎殿の命に代れば。糸屋の家も立つといふものそなたは跡にながらへて。お袋への孝行。わしが死んだら亡き跡の。香花でも取つてたも。小糸。地さらばと立上る。裾に取付き。詞マ、、待つて下さんせ尤もぢや〳〵。サア留めはせぬ留

めはせぬ。コレ事を分けてのお言葉を悪う。地聞くではなけれども。逢ひなれ初めて二年の人目にせかれせかるゝも。戀路の中の樂みに。割れても末に間の戸の影やお庭の小柴垣。荻吹く風におそはれて。帶のしやらどけ亂れ髪。結ぶ緣は七月の。お腹に宿る月の數。重るお身の御難儀も。皆私から起つた事。それにお前を先立ててなに樂みにながらよう。一所に殺して下さんせ。むごいつれない心やと。恨み フシ口說くぞ。道理なり。詞ヲ誤つたこらへてたも。とてもかくてもながらへず。死ぬると覺悟極めたそなた。コレ一所に死んで未來で添はう。エヽ嬉しうござんす嬉しうござんす。そんなら早う袋を出て。心中所はシイ。聲が高いと フシ口に袖。詞左七樣の聲がする。戻つてかえと姉お房。納戸を出づるも。さぐり足。イヤ申し左七樣。小糸に樣子は聞かしやんしよ。母樣のお歎き。伯父さんのお氣苦勞。中に立つた此房が。心の中の切なさは。針の褥に寢るよりも。つらい苦しい憂き思ひ。私はふつつり思ひ切り。諦めてゐるほどに。どうぞ戻つて妹と。中よう添うて家を立て。地母樣や伯父樣の。お氣を休めて下さんせと スエテ手を合したるいぢらしさ。地死ぬると覺悟極めたる。思ひをそれと悟られじと。詞ヲヽこれお房。ようまあ尋ねて來てたもつた。今戻つて何もかも樣子は聞いた。モウ〳〵これから直ぐに往んで。其方と一生添ふ氣ぢや程にノ。マ伯父御と連立ち先へ往んでノ。ソレ先へ出て。ソレ待つてゐやと地小糸に知らす フシ裏表。詞お房必ず欺されな。ありやみな嘘ぢや。偽りぢやと。地納戸を出づる伯父十兵衛。詞コレ左七殿。こなたが糸屋の家を出た跡に。殘してあつた書置。お袋にも姉にも見せず。俺が胸一つで讀んで見た。小糸とは國から譯のあること故。死ぬるとある書置。讀んで見ておれも悔り。所に又うす〳〵聞けば。此邊に店借して。二人世帶を持つてゐるとの噂。ムムそんなら國から譯のあるといふも。死ぬると書いたもコリヤ皆嘘ぢやわい。エエ憎いやつら義理知らず。おのれやれ引きずつて戻つて。何でも姉めに添はさうと。思ふ心の一徹でコリヤ小糸。さつきの樣に言うたのぢやが。奥から立聞きしてゐれば。腹まで大きうなつて。モウ七月といふ事は。夢にもおれは知らなんだ。さういふ譯なら尤もぢや。道理ぢやがコレ左七殿。こなた故に人を殺し。お尋ね者になつても。色紙を尋ねて渡さねば。男が立たぬと綱五郎は。アレ遠國へも立退かず。うろ〳〵〳〵としてゐるぞや。可愛いさうにそれ程に思ふ志は無足

し。糸屋の家を立てもせず。色紙もお主へ差上げず。死んでこなた濟みますか。サアそれは。サどうぢや。返事があるなら聞きませうと。地理に責められて當惑涙。お房はかねて用意の剃刀。自害と見ゆれば十兵衛押留め。詞ヲヽわれがのも尤もぢや〳〵尤もぢや。道理ぢや尤もぢやが。コリヤ爰をよう聞いてくれ。そちが今死ぬるとな。只さへ枕の上らぬお袋。それこそ直ぐにころりと往生。さすればそちが死ぬるのは。親を殺すも同じこと。親殺しになつても大事ないか。大事なか死ね〳〵〳〵。ア斯うはいふものの。下地から譯のある事と聞いたら。何の生きてゐたからう。死なうといふも尤もぢや〳〵。がまたこちらの二人の奴らも尤もぢや。爰の道理を聞分けて。三人共に死んでくれな。どうぞ思ひ止つてくれと。地三方四方の命をば繋ぎ留めたる糸屋の伯父。死ぬも死なれぬ三人が。涙は千筋百筋にもつれ合うたる糸口の。一度にわつと聲を上げ フシ泣沈むこそ道理なれ。地世を忍ぶかやにも心奥ふかき。長屋を尋ね綱五郎が。跡より付いたる捕手の犬。とは知らずして門の戸叩き。詞左七殿の家は此處か綱五郎が尋ねて來たと。地いふ聲聞くより以前の捕手。フシ飛ぶが如くに引返す。地内には皆々恟りの。中に十兵衛戸を引開け。這入るを見るより跡ばつたり。フシ外面あやぶむばかりなり。詞イヤ伯父者人。何にも怖い事はござりませぬ。頼まれた小倉の色紙。取返すまでは男の意地。命惜しんで逃隠れたが。もうこつちから名乘つて出る氣。コレ左七殿。お頼みの色紙。受取らしやれと懐より。地取出し手に渡せば押戴き押戴き。詞ハア有難し忝し。男づくとはいひながら。何の誼みもない拙者が。お頼み申したばつかりに。科人にして死なせてはは。生面下げてこの左七。生きながらへてはゐられませぬ。科を我が身に引受けて。ハテさて悪い合點な人。男と見込んで頼まれたら。命を捨てても引かぬといふは。ソリヤ何國でも同じ事。昔大阪の黒船忠右衛門。誼みもない五郎八に頼まれたばかりに。獄門の庄兵衛を殺し。科人となつたこれもこれ男の意氣づく。ハテ大阪ばかりに男があるぢやあるまいし。花のお江戸の本町生れ。命をかばふ心なら。天窓から頼まりやせぬと。地投出したる命の安賣。高いは性根の据ゑ處。江戸の生粹混りなし。フシ本町育ちと知られたり。地十兵衛は涙ながら。そちは覺悟極めても母の歎きを思ひやり。一先づ爰を落ちてくれと。いふに二人の妹も母様のお歎きを。思ひやつて暫しでも落ち延びて下さんせと。取付き縋れば十兵衛

が。用意の路金財布の紐。首にかけたる天の網。世間に人音物さわがしく。戸の隙間より差覗けば。表は數多の捕手の人數。恂りわな〳〵驚く人々。綱五郎ちつとも騒がず。詞名乘つて出ようと思へども。一旦伯父貴の詞を立て。母への孝に切拔けん。左七殿は小糸を連れ。伯父者人お房諸共。怪我せぬやうに裏道から。地落ちた〳〵と追ひやり〳〵。身拵へする間もなく。詞捕つた捕つたと捕手の人數。戸を打破つて込入るを。やり過して肩車。どつこいさうはと取付くを。振りほどいて腹檜。地打付け〳〵摑み投げ。投げつけられて數多の捕手少し白けて〈見えにけり。フシかゝる所へ。待つた待つたと石塚彌三兵衛。岩藤に繩をかけて引立て來り。詞淺草の寺内に於て。色紙を盗み取つたるは。山住五平太と此岩藤が白狀。九郎兵衛とても其同類。色紙を首尾よく取返し。左五郎先知に歸る上は。兩人共に殺し德と江戸屋敷より御差圖。則ち殿の御墨付と。地差上げ見すれば人々はフシ嬉しさ言はん方もなし。地左七が國へかへり咲き。お房小糸は妻妾とむすぶ糸屋の跡取りは。緣の網五郎本町に。育ちけなげの糸櫻。花は三吉野男氣は。花のお江戸の眞たゞ中。中はあたると讀む文字。フシ新につゞる假名書きのすみいろ筆の内匠よく。むらがり來る御最屓を。力鬼百合伊久千代も。袖をつらぬる君が代は關の戸ささぬ芳環の。いともかしこき御惠み榮ゆる。春こそ久しけれ

安永六酉年三月十一日

作者　紀上太郎
補助　達田辨二

右之本頌句音節醫譜等令加筆候師若鉞弟子如縷回吾儕所傳泝先師之源幸甚

名代　薩摩屋小平太
座元　豐竹新太夫

江戸橋四日市廣小路
書肆　上總屋利兵衛版